

令和4年度

つながれ ひろがれ ちいきの輪 in TOKYO

《東京の高齢者福祉施設による、地域によりそうキャンペーン》

コロナ禍における
高齢者福祉施設・事業所の
地域に向けた取り組みに関する
調査報告書および事例集



社会福祉法人 東京都社会福祉協議会
東京都高齢者福祉施設協議会

地域包括ケア推進委員会
つながれ ひろがれ ちいきの輪 inTOKYO ワーキングチーム

はじめに

～コロナ禍での実践と課題から、これからを考えよう～

「つながれ ひろがれ ちいきの輪」(以下、「つなひろ」)は、東京都高齢者福祉施設協議会の会員施設・事業所による、地域に寄り添うキャンペーンとして、平成28(2016)年度に始まりました。

キャンペーン開始の前後、社会福祉法人は「非課税法人でありながら利益をため込んでいる」「もっと地域の福祉ニーズに応えるべき」といった批判にさらされていました。実際には、多くの法人・施設が地域の福祉ニーズに対する様々な取り組みを行っていたものの、その活動が地域の方々や行政等に伝わっていなかった、私たちから積極的にPRしていなかったという点で、私たちにも反省すべき点がありました。

そこで、会員施設・事業所に対しては、地域のニーズに対する取り組みを積極的に進めていこうと投げかけ、取り組みを取りまとめて地域や関係機関の方々に知らしめていくことを目的として、キャンペーンという形でスタートしたのが「つなひろ」です。

キャンペーンには、毎年およそ120の取り組みがエントリーされ、他施設の取り組みを共有するための見学会や事例報告会を開催し、毎年の取り組みを報告書として取りまとめてきました。継続する中で、複数施設・法人や地域の各種団体との協働の取り組みも増え、多くのメディア等でも報道されるなど、地域における輪のつながり・ひろがりを実感していました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、地域・高齢者施設の状況が一変し、令和2(2020)年度から今年度に至るまで、キャンペーン実施を見送らざるを得なくなりました。

コロナ禍は、キャンペーン中止だけでなく、各施設・事業所で行われてきた活動の多くに中止や縮小をもたらしましたが、地域における福祉ニーズがなくなったわけではありません。むしろ、コロナ禍によって新たなニーズが出現しているはずだと、私たちは考えました。

また、厳しい状況下でも、様々な工夫を凝らして活動を継続している、新たな取り組みをしている施設・事業所もあると考え、令和2(2020)年度に実態の調査と課題抽出のためにアンケート調査を実施しました。

その後は、コロナ禍における活動事例を共有する取り組みを行い、各施設の参考にさせていただくとともに、地域に向けた活動の灯を絶やさないように心がけてきました。

今年度は、コロナ禍が長期化する中で再度、会員事業所の取り組み状況や工夫・課題等を明らかにするために、2度目のアンケート調査を行いました。今回は、それぞれの取り組み事例の収集も行うことで、工夫や課題と合わせて、より具体的な状況の把握ができました。

本報告書は、アンケート調査の結果や各事例の紹介と、これまでの振り返りや今後の展望をつなひろワーキングチームメンバーが語り合った「座談会」をまとめています。

コロナ禍は当初の見込みよりも大幅に長期化し、高齢者施設と地域との接点も寸断しました。令和5（2023）年5月に、感染症法上の取り扱いが5類へ移行しましたが、高齢者施設・事業所を取り巻く環境は依然として厳しいものがあります。

そのような中、社会福祉法人、高齢者福祉施設・事業所として、地域の福祉ニーズに目を向け関わっていく必要性は、ますます高まっています。

この報告書が、それぞれの法人・施設・事業所における、地域に向けた活動への原動力と参考となれば幸いです。

令和5（2023）年11月

社会福祉法人東京都社会福祉協議会
東京都高齢者福祉施設協議会
地域包括ケア推進委員会
つなぐれ ひろぐれ ちいきの輪 ワーキングチーム
(チームリーダー) 今 裕司

目次

はじめに

第1章 アンケート調査結果・取り組み事例について	1
I アンケート結果概要	2
II 調査結果	3
1 地域に向けた取り組みの実施状況	3
2 コロナ禍における地域に向けた取り組みの課題とヒント	7
3 地域に向けた取り組み事例	12
(1) 取り組み事例一覧	12
(2) 施設・事業所ごとの取り組み内容	14
第2章 つながれ ひろがれ ちいきの輪 in TOKYO ワーキングチーム座談会 「つながれ ひろがれ ちいきの輪 in TOKYO のこれまでとこれから ～コロナ禍の地域や福祉施設・事業所への影響とこれからの向けて～」	64
ワーキングチーム名簿、奥付	90

第 1 章

アンケート調査結果・取り組み事例について

I アンケート調査概要

1 調査名称

つなぐれ ひろぐれ ちいきの輪 inTOKYO アンケート 2022 『地域に向けた取り組み状況及び実施に向けた工夫』

2 調査実施主体

社会福祉法人東京都社会福祉協議会 東京都高齢者福祉施設協議会
地域包括ケア推進委員会 「つなぐれ ひろぐれ ちいきの輪 inTOKYO ワーキングチーム」(以下、「つなひろWT」とする。)

3 調査の目的

コロナ禍の状況もふまえ、地域に向けた取り組みを実施するにあたっての工夫やアイデアを把握、結果を共有し、各施設・事業所での取り組みの参考とする。結果を基に、都内の高齢者福祉施設・事業所が、コロナ禍という厳しい状況のなかでも、地域ニーズに対する取り組みを行っていることを地域や関係機関に知らせる。取り組み状況から課題を把握し今後の活動に活かす。

4 調査概要

対象 東京都高齢者福祉施設協議会 会員施設・事業所

期間 令和4年11月30日～12月26日

配布・回答方法 メールにて配布、アンケートフォームへの入力による回答

配布数 1,016か所（複数事業所で同アドレス登録の場合は重複を避け、1か所に配布）

回答数 91（回答事業所数 80）

※取り組み1件につき回答1件のため、回答数と回答事業所数が異なる。

<回答施設・事業所の種別（複数選択可）>

種別	回答数（件）
特養	64
養護	6
軽費	9
包括	13
デイ	24
その他	12

* 「その他」記載内容（抜粋）

居宅介護支援事業所、小規模多機能居宅介護、短期入所、認知症対応型通所介護、訪問介護、福祉用具 等

Ⅱ 調査結果

1 「地域に向けた取り組みの実施状況」

(1) 2022年度内の地域に向けた取り組みの実施状況（複数選択可）

	回答数 (件)
実施している（した）	54
実施を予定している	11
実施していないが、今後の実施の可能性を検討中	24
実施しておらず、今後の実施予定もない	3
その他	4
合計	96

- * 「その他」記載内容（抜粋）
- ・コロナ禍で中断（中止）している。

* 「実施している（した）」、「実施を予定している」のいずれか、または両方を選択した回答は61件

●●● 【参考】令和2年度調査結果より ●●●

Q.「令和2年度の取り組み実施について」

	件数(件)	割合
取り組みを行った	54	39.4%
取り組みを行っていない	67	48.9%
今後予定している	16	11.7%

※令和2年度調査結果からの抜粋

<コメント>

「実施している（した）」との回答は、令和2年度調査の「取り組みを行った」と同数、「予定している」は減っているものの、「実施の可能性を検討中」が24件あった。

選択肢が異なるため単純な比較はできないが、

- 地域に向けた取り組みにおける新型コロナウイルスの影響は、2年前と変わっていない。
- 一方で、コロナ禍の終息(制約の緩和)を見据え、または、感染対策を講じた上で取り組もうと考えている施設・事業所は増えつつある。

以上のように考えられる。

以下、(2)～(6)は、(1)で「実施している(した)」「実施を予定している」と回答した61件について、その取り組み内容を問う設問。

※取り組みごとの詳細については、P12～「3 地域に向けた取り組み事例」を参照。

(2) その取り組みの内容について、当てはまると思う分類を選択してください(複数選択可)

N=61

	回答数(件)
①介護予防・高齢者支援	25
②アウトリーチ(訪問活動)	2
③相談・家族支援	12
④カフェ・居場所・地域交流	29
⑤学びの機会	22
⑥情報発信	17
⑦防災	11
⑧その他	2
未回答	6
合計	126

*「その他」記載内容

- ・生活困窮者等への食材提供・フードロス対策
- ・職場体験

(3) その取り組みは、コロナ禍以前からの継続ですか。新たに始めた取り組みですか。(複数回答可)

N=61

	回答数(件)
コロナ禍以前から継続した取り組み	27
コロナ禍の状況等に応じて、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み	16
コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み	12
コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み	11
その他	1
未回答	1
合計	68

*「その他」記載内容

- ・コロナ禍でもできる取り組みを検討して実施

●○○ 【参考】令和 2 年度調査結果より ●○○

Q.「令和 2 年度に行った取り組み、または今後予定している取り組みについて」

	件数(件)	割合
昨年度以前から継続している取り組み	47	68.1%
今年度からの取り組み	67	31.9%

※令和 2 年度アンケート調査結果からの抜粋

<コメント>

- ① 今回調査の「コロナ禍以前から継続」「コロナ禍の状況等に応じて実施方法を見直すなどして継続(再開)」の合計を、2 年度調査の「昨年度以前から継続」と比較
- ② 今回調査の「コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み」「コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み」の合計を、2 年度調査の「今年度からの取り組み」と比較

上記 2 点では、件数に大きな違いは見られなかった。

- コロナ禍以前からの取り組みの継続(再開)のうち、4 割弱が状況に応じて実施方法等を見直しており、活動内容や感染状況に応じた対応を図っていることが伺われる。
- 新たな取り組みでは、コロナ禍によって生じたニーズと、コロナ禍とは関係ない地域のニーズが半々であり、各施設・事業所が、幅広い地域ニーズに目を向けていることが伺われる。

(4) その取り組みは、貴施設・事業所単独の取り組みですか。または複数の機関等と連携・協働した取り組みですか。

N=61

	回答数(件)	割合
施設・事業所単独の取り組み	23	37.70%
複数の機関・人等と連携・協働した取り組み	37	60.66%
未回答	1	1.64%
	61	100%

(5) その取り組みの協働先を選択してください。(複数回答可)

N=60

	回答数(件)
①同法人内の他施設・事業所	16
②近隣の施設・事業所	13
③区市町村内の同種別事業所のネットワーク	5
④他種別事業所も含んだ、区市町村内の事業所等のネットワーク(地域公益活動推進に関連したネットワーク含む)	5
⑤地域包括支援センター(※貴事業所が地域包括の場合は除く)	7
⑥自治会・町内会(※自治会連合会含む)	17
⑦民生児童委員(※民児協含む)	7
⑧学校・PTA	7
⑨ボランティア(団体)・NPO,	14
⑩商店(会)や企業	6
⑪区市町村社会福祉協議会	9
⑫小地域活動のネットワーク、協議体(生活支援体制整備事業)、地区社協等	6
⑬その他	2
未回答	13

*「その他」記載内容

- ・ふれあい福祉委員会
- ・自治体(2件)

(6) (4)で「複数の機関・人等と連携・協働した取り組み」を選択した場合、その取り組みの実施主体(または呼びかけ人、取りまとめ役、リーダー等)はどこですか。

N=37

	回答数(件)	割合
自施設・事業所	19	51.35%
他機関・団体等	14	37.84%
未回答	4	10.81%
	37	100.00%

2 「コロナ禍における地域に向けた取り組みの課題とヒント」

※ 以下、自由記述式でご回答いただいた内容です。近似の内容や使用されている語句等を基にワーキングにて概ね整理し、番号を付けて掲載しています（順不同）。

また、内容に大きく影響しない範囲で、固有名詞や表現を加工、省略するなどしています。

（１）コロナ禍（With コロナ・After コロナ）における地域に向けた取り組みの実施にあたっての課題はなんですか。

1) 人とのふれあいや交流による施設内への感染の持ち込み、利用者への感染拡大への懸念

① 利用者と外部の方との交流を伴う活動、外部に開く活動の実施の困難さ

- ウィズコロナといっても、やはり感染終息までは、高齢者が直接外部の人と触れ合うようなイベントはできない。ボランティアの受け入れや地域への外出は、大幅な制限が続いている。
- 施設に感染症を持ち込まない対策。
- 入居者の健康を一番に考えると、積極的に動けない。
- 高齢者をお預かりしている施設であるが故にご利用者を絡めた交流はまだまだ難しく、町会活動等は職員のみ参加となっている。
- 高齢者施設であるため、地域イベント等への参加や以前のような活動を安易に実施・活動できない。
- コロナ前は地域にも施設を開放して運営していたが、コロナ禍においては全く実施出来なくなった。国なりから指針を示して頂けるとありがたい。
- 高齢者や、障害者である比較的感染しやすい人との対面で関わるにあたり、どのようにすれば感染が防げるか。
- 感染防止のため、ご利用者も参加していただき、地域の方々との交流を図りたいができないこと。
- 感染予防対策として、入所ご利用者と地域住民との交流ができない。関わりがない形で、それぞれの企画を行う形になってしまう。
- 施設内にコロナウィルスを持ち込む事は絶対に出来ないのも外部との接触が職員を含めて困難と感じている。
- 自分たちの事業所にボランティアも受け入れられない状況がコロナ感染症が広まってから続いている。以前来ていた地域のこどもたちと高齢者との関りも絶たれており、自分達が派遣していた職員も、行ったことで事業所に感染症が蔓延してもいけないので、なかなか地域に行かなくなっている。
- 感染対策を講じた上での取り組みを模索してはいるが、万が一（感染をしてしまう。持ち込んでしまう。）を考えると、中々踏み出せない。
- コロナ禍前は地域に開放したイベント（おまつり）を毎年実施していたが、感染予防策の観点から中止となっている。
- 毎年開催してきた施設のお祭りは、昨年今年とやむを得ず中止とした。地域のお祭り等は開催され始めるところもあるが、高齢者施設として、検討した結果中止とした。
- コロナに関する社会的な考え方。高齢者施設なので、入居者が感染した時の病状悪化のリスクがあ

ること。またその事によって世間の理解度が心配される。

- コロナを持ち込まない事が重要となっているため、実際のところ現状は地域に向けた取り組みの実施は難しいところがあります。コロナが収束し、地域イベントが復活してきたタイミングで何らかの取り組みを行えればと考えております。
- 市の介護サービス事業者協議会が主催して、介護の日合同イベントを毎年開催してきたが、今年も協議会の検討のすえ、中止とした。各事業所とも、それぞれの対応で苦慮しており、集まってイベントを開催するのは難しいとの判断
- 地域交流スペースの活動の中止。特養併設の為、不特定多数の方が集まる活動は自粛している状況である。
- 近隣住民を対象とした無料の体操教室を開催していましたが、コロナ禍以降中止をしています。
- With コロナ・After コロナとなったとしても、施設にコロナを持ち帰ってしまう可能性が高くなることを考えるとやはり躊躇いがある。
- 感染状況は拡大傾向にありますが、標準的な対策を実施した上で地域と協力できる活動に組みたいと思っています。
- 感染対策を行いつつ、コロナに対する不安を払拭しながら取り組みを進めたい。
- オープンガーデンやお祭りなど地域開放を年に数回行っていたが、それが全くできなくなった。その間ボランティアさんの高齢化・フレイル化という別の問題が生じた。
子育て施設を併設しているが、コロナ以前は直接行事ごとの触れ合いが中心であったが、コロナ以降は、ZOOM を使った毎朝のご挨拶が慣例となった。特に、ボランティアの数が多く、地域にオープンされていた施設だけに、コロナの痛手が大きく、施設として全く異なる方向性を模索しなければならず大変であった。

② 大人数の方や集団を対象とした活動の実施の困難さ

- 人数を制限せざるを得ない。
- 人が集まったの取り組みが難しい。
- 集団での活動が難しい。
- 集合型の催しがしづらい、施設が借りることができない
- 皆さんが集まって情報交換をする場所の確保や密にならない対策や飛沫防止や換気等
- 大人数や近距離での取り組みができにくい。

③ 特に感染リスクが高い、飲食を伴う活動の制限

- 飲食あり、集客で行っているイベント等をなかなか再開出来ない。施設外のスペースを活用するところが、地域の方に施設を知って頂くことに繋がりにくい面がある。
- 感染リスクの高い、会食関係は設定しにくいです。

④ 代替手段となるオンラインを活用した活動の困難さ

- ICT 機器を活用した Zoom でイベント開催も対象者が限られてくる。(高齢者には難しい)
- 講習会など WEB と集合を合わせたハイブリッド型講習を行ったが、高齢の住民は WEB 環境がな

い方も多いことが課題。

- コロナの感染状況に応じて Web 開催とするのか、対面式にするのか、両方とするのか、それを見極めていかなければならず、開催を予定していても中止せざるを得ない場合も生じている。また、どういう状況になったらコロナ禍前の対応に戻すのか、その時期の見極めも困難。

⑤ 利用者の家族への配慮

- 入所施設としては、施設内で感染者が発生した際のご家族からのクレームを気にしてしまい、職員が及び腰になってしまう。
- 感染症対策と、利用者様・ご家族の安全と安心感。
- with コロナの感染防止策に関する考え方が人によって異なり、特に入居者家族に関しては十分な理解を得る必要があるため、制限緩和の方針決定が難しい。

⑥ 対応する職員への配慮や体制等の課題

- 職員の理解（コロナ禍のリスクがある中での活動の必要性）
- 一施設で関わるには、軽費の職員数では困難。法人内他事業所も同様であるので、法人内に、検討チームを作り、地域貢献の取り組みを行う仕組みにしている。
- 面会方法も感染状況に左右される中、人材などの問題もあり、なかなか難しいのが現状です。
- 少ない職員で何ができるのか模索中です。
- 感染対策については法人一律で決定しているため、施設の事情や地域性に合わせて対応していくのが難しい。
- 人員、施設内の合意形成（必要性など）、経費、自治町会の活動自粛
- 高齢者施設の現状と、地域の方々の生活および感染症に対する考え方には大きな差があると感じている。地域の方々は、すでにコロナ禍以前とさほど変わらない生活・行動になっているように思われるが、高齢者施設・職員は、いまだに緊張と制約を強いられている。

2) 地域の住民、活動者、団体のコロナ禍を通じた変化

- 高齢者の場合は「出る人、出ない人」の差が開いてきている。包括では「出ない人」が主な対象になるので、いかに状況を把握していくかが課題
- 新型コロナに関する考え方の違いにより、地域や各種団体（の構成員）に分断が起きていていると感じている。様々な考え方を受け入れながら活動を展開していくことが、今まで以上に求められているように思われる。
- コロナ禍となり、多くの地域活動団体の活動延期や中止、解散などもあり。
- 今年度は、行動制限がないケースとなったが、今までのブランクを取り戻せない団体も多い。活動のモチベーションの低下や、活動ができても新たに一から出直して、変化に応じた対応が必要と感じている団体が多い。
- オープンガーデンやお祭りなど地域開放を年に数回行っていたが、それが全くできなくなった。その間ボランティアさんの高齢化・フレイル化という別の問題が生じた。（※一部再掲）

(2) コロナ禍 (With コロナ・After コロナ) における地域に向けた取り組みの実施に向けて、「あったらいいと思う取り組み」「(現状では難しくても) やってみたいと思う取り組み」「気づいている・見えている地域のニーズ」などがありますか。

1) 社会福祉法人・福祉施設としての専門性や強みを活かした地域のニーズの解決につながる取り組み、交流や場の提供

① 高齢者の交流、居場所づくり、健康づくり、見守り、相談、多世代交流等

- 月に1回程度でも集まってお話ししたりお茶を飲む機会が作れたらと検討している
- 地域住民が気軽に通えるカフェを展開したい。施設職員がその場で相談対応ができることで、ACPアプローチの推進がしたい。
- 喫茶を再開し、認知症カフェとリンクした活動を行いたい
- 食事について地域の方へ提供したいと考えている。しかしながら感染リスクを鑑みると難しいと思う。
- 施設の南庭にて大麦畑を整え、地域の方と取り組んでいけたら思っています。計画をより具体的にしていこうと考えています。
- 安全に外出できる場所の提供。園芸活動とか利用して屋外で出来る活動。
- 健康づくり(健康教室や体操など)
- 高齢者介護教室などの法人の人的資源を生かした地域に向けての取り組み
- 令和元年度より、市からの依頼もあり、地域の高齢者の介護予防の観点から施設内ホールを提供し、月に2回の体操教室を開催しておりました。地域の方々と施設の交流の場となっておりますが、コロナ感染が確認され以降、現在に至るまで開催できておりません。コロナ感染症が終息し再開できることを願っている所です。
- ボランティアや学生の学びの場所としての施設でありたい。地域の誰でもが立ち寄れる施設でありたい。園芸ボランティアはコロナ中も継続していたので、以前の様にお庭を開放し、ワークショップを来年度は検討していきたい。
- コロナが終息したら餅つき大会をやってみたい。
- コロナを経て、より一層地域をもり立てていきたいと思えます。明るく元気が出るお祭り等の参加ができれば良いなと考えます。
- ふれあい活動(高齢者の世代間交流など)
- 見守り事業(高齢者世帯訪問や家族が遠方の方への定期連絡等)
- 終活(本人・家族)
- 直接会うこと、集うことの大切さを実感できる取り組み (ICT の活用・バーチャル等を否定するものではないが、リアルの良さを再認識することも必要だと思います)
- 地域区民との関わり、ボランティアさんとの関わり。
- 地域との交流が途絶えてしまっている気がする。どのようなことなら開始できるか模索し、つながり続けていきたい
- 地域のニーズをうかがう機会があればと思うが、自治会なども出来ていないようです。

② 高齢者に限らない幅広い地域ニーズへの取り組みや複数法人・施設での取り組み

- 孤立している高齢単身世帯、ヤングケアラー、シングルマザー、生活困窮世帯等地域のニーズに、社会福祉法人ができることを検討していきたい。
- 地域コミュニティにおける外国人に関する課題解決
- 社会福祉法人の地域貢献事業の充実
- 住民同士の生活支援サービスの拡充
- 生活支援コーディネーターの周知
- 子ども食堂、地域住民向けセミナー、見守りキーホルダー、防災訓練
- 小学生から大学生まで幅広い児童学生に向けての「介護の魅力」や「介護の必要性」の商業活動。地域に於ける「介護 119 番」＝困ったときの相談窓口の設置。
- 救急時の対応(AED や心臓マッサージなど)AED の設置場所の確認や対応
- 地域住民との防災訓練(机上訓練)
- 複数の法人、民間事業所が協力して行ってきたことに意義があったと思うが、コロナ禍で何とか開催できる方法を模索したいと思う。他地域で合同イベントなどが開催されていた事例があれば参考にしてみたい。
- 集える場や機会がどこも減少しているということ。
施設を開放していきたいが感染リスクを考慮すると踏み切れない。
施設外での活動方法を考えていかないといけないと思いつつも進められていない
現状では施設ごとでの取り組みは困難に感じるため、地域内の他施設や他法人との連携を強め協同で実施していく方が良いと感じている。区社協や包括が導入のまとめ役をやっていただくと、賛同施設も増えまとまりが良くなるのではないかと思う（いずれは法人チームのみで運営できるようにしていく）

③ ICT 技術や機器等を活かしたつながるしくみ

- ICT 等の技術を生かしていく活動…いわゆる情報弱者をなくしていく取組みや、情報弱者にリーチできる取組み
- 地域の高齢者と Zoom 等の手間をかけずに画面上でコミュニケーションが取れるシステムを構築できれば良いと思う。学校で学生にタブレットを支給するように、自治体等が簡易な操作でつながるような端末を貸し出し、それを複数のサービス提供者が活用するようにする等。
- どこでもwebですぐにつなげることができる。つながりたいところが、互いにネット上にて検索しあって共にどのようにコロナ禍でも活動ができるかを相談しながらできる方法でつながっていくなど。
- 地域の学校に車椅子の使い方のレクチャーをする予定でしたが、感染対策の都合上、中止になりました。やはり、学校などの複数人が集まる場所での発信に需要があると思います。コロナ禍で、オンラインという強みも持つことができたので、今後は併用し実施していくべきだと思います。

以上

3 地域に向けた取り組み事例

(1) 取り組み事例一覧

* 町村部や市部の取り組みもできるだけご覧いただきたく、通常とは順序を逆に变え、行政番号順を降順で掲載しています。

* 取り組みを「実施している(した)」または「実施予定」と回答されたものについて、掲載しています。

なお、報告書への掲載意向確認の設問で、「不可」「条件つき可」と回答をしたものは除いています。

* 事業所で複数の取り組みがある場合、原則、1件ごとに回答いただいています。

* 原則、回答いただいた内容をそのまま掲載していますが、一部、表記を修正、整理しています。

No.	区市町村	事業・イベント名	事業所名	事業所種別	掲載ページ
1	檜原村	おすそわけ	桧原サナホーム	特養	
2	日の出町	配食サービス	栄光の杜	特養	
3	瑞穂町	牛乳パックで社協応援!	フラワープラム	デイ	
4	あきる野市	あきるのルピア塾	あすなろみんなの家	デイ	
5	あきる野市	原小宮ふれあいお茶飲み会	あすなろみんなの家	デイ	
6	あきる野市	近隣のゴミ拾い	増戸ホーム	特養・養護	
7	あきる野市	地域合同防災訓練	増戸ホーム	特養	
8	羽村市	町内防災訓練	特別養護老人ホーム羽村園	特養	
9	羽村市	学習支援「神明台自習室みらい」	特別養護老人ホーム神明園	特養	
10	羽村市	放課後の居場所作り「かふえてりあ はろ」	特別養護老人ホーム神明園	特養	
11	清瀬市	きよせ10の筋トレ	きよせ清雅地域包括支援センター	包括	
12	清瀬市	休み処(サロン)	きよせ清雅地域包括支援センター	デイ	
13	東大和市	職場体験	デイサービスセンター風の樹	特養・デイ・その他	
14	東大和市	地域懇談会	やまと苑	特養	
15	狛江市	初任者研修、実務者研修	こまえ正吉苑二番館	特養	
16	日野市	畑交流会	特別養護老人ホーム浅川苑	特養	
17	町田市	グッドタイム教室	合掌苑桂寮	特養・養護・デイ・包括・その他	
18	町田市	グッドタイム教室	合掌苑	特養	
19	府中市	フレイル予防講座	安立園特別養護老人ホーム	特養	
20	府中市	配食サービス	安立園特別養護老人ホーム	特養	
21	府中市	介護予防体操	特別養護老人ホーム府中若松苑	特養	
22	青梅市	ウェルカムフェスティバル	大洋園	特養	
23	青梅市	青梅インター付近清掃活動	今井苑	特養・デイ	
24	武蔵野市	とらいふマルシェ	とらいふ武蔵野	特養	
25	八王子市	第6回八王子介護フェア	偕楽園ホーム	養護	
26	八王子市	夏休み工作教室WEB 大根掘り交流会	美山苑	養護	
27	八王子市	地域合同防災訓練	新浅川園	特養・軽費・デイ・包括	

No.	区市町村	事業・イベント名	事業所名	事業所種別	掲載ページ
28	江戸川区	なぎさ☺フードドライブ	なぎさ和楽苑	特養・包括	
29	葛飾区	オレンジカフェ	東四つ木ほほえみの里	特養・デイ・包括・その他	
30	足立区	谷在家さくらマルシェ、地域との防災訓練、さくらサロン、野菜即売会（施設敷地無償貸出）、皿沼さくら市（施設敷地無償貸出）、介護相談	特別養護老人ホームさくら	特養・デイ・包括・その他	
31	練馬区	近隣の幼稚園とのオンライン交流会	田柄デイサービスセンター	デイ	
32	練馬区	ワクチン接種会場	特別養護老人ホーム上石神井幸朋苑	特養	
33	板橋区	防災訓練、食からつながるプロジェクト	ゆめの園りあん若葉 特別養護老人ホーム	特養	
34	北区	麻雀ワロフ、目黒区古向防災訓練、ぽっぽカフェ、オレンジカフェ	新町光陽苑	特養・デイ・包括	
35	北区	朝活	東京都北区桐ヶ丘やまぶき荘地域包括支援センター	包括	
36	豊島区	認知症カフェ	菊かおる園	特養・軽費	
37	豊島区	杜のカフェ（認知症カフェ）	特別養護老人ホーム 千川の杜	特養・軽費	
38	杉並区	「介護予防教室」「若年性認知症の集い」「防災教室」	特別養護老人ホームフェニックス杉並	特養・その他	
39	渋谷区	地域の居場所 パールライフ	デイサービスセンターパール鉢山	特養・デイ・その他	
40	世田谷区	小学生への車イス体験事業	デイホーム桜丘	デイ	
41	世田谷区	地域向け勉強会	砧ホーム	特養	
42	世田谷区	どんと焼きの薫回収	デイサービス博水の郷	デイ	
43	大田区	響会YouTube	好日苑	特養・デイ・包括・その他	
44	目黒区	講座「特養での生活とは」開催	さんホーム目黒	特養	
45	目黒区	家族介護教室、会食サービス	目黒区立特別養護老人ホーム東が丘	特養・デイ・その他	
46	目黒区	健康カレンダーの送付	目黒区立特別養護老人ホーム東山	特養・その他	
47	品川区	心のつながり 地域とともに2022	社会福祉法人品川総合福祉センター（かえで荘）	特養・その他	
48	品川区	地域祭礼	品川区立中延特別養護老人ホーム	特養	
49	江東区	介護家族教室・防災訓練・介護の日・看護の日イベント	介護老人福祉施設あじさい	特養	
50	台東区	介護サロン（特別養護老人ホームとは）	フレスコ浅草	特養・その他	

No.1

檜原村

特養

調査時点で実施

おすそわけ

檜原サナホーム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

・賞味期限切れ前の防災備蓄食を大量に頂き(立川の倉庫に取りに行き)、村内のNPO福祉事業所、無認可保育園等に確認し、お裾分けした。
 ・善意銀行からの、児童書のプレゼントに対し、事前に近隣の無認可保育園にリストを提出し、希望を確認し、絵本や紙芝居を20点程寄贈した。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年11月・2023年2月

【実施にあたっての工夫】

児童書については、事前に希望を確認し、欲しい物を選んできた。

実施にあたってのコロナ禍の影響

・コロナ禍でなければ、施設を訪問いただき、入居者から子供たちに手渡しでプレゼントをしたり、こちらで紙芝居を読んであげる等の交流をして、子供とお年寄りのふれあいの機会とするものだったが、感染予防の為、保育園に本を届けただけとした。
 ・善意銀行に本を受け取りに行っている最中にクラスターが施設で発生し、一部の本を持ち帰れなかった。

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○ボランティア(団体)・NPO

実施主体

自施設・事業所

配食サービス

栄光の杜

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

日の出町にお住まいの独居及び介護者不在などで食事の支度が難しい方へ配食サービスを行いました。お届けするときに声掛けなどで安否確認も行いました。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

専用の保温弁当箱で温かいものは温かく、フルーツなどの保冷バッグにいれるなど工夫した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

配食専用車の消毒、届ける職員はフェイスシールドをつけるなどの感染対応を行った。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

牛乳パックで社協応援！

社会福祉法人 梅の樹会 フラワープラム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

「内容」

法人で毎日大量に捨てていた牛乳パックをリサイクル資源として定期的に社協にお届け。社協は換金する取り組み。牛乳パックを厨房に取りに行き、指定の開き方に切り、社協へお届けする役割は、認知症対応型の利用者様の「お仕事」。

「対象者」認知症対応型通所介護 利用者様

「きっかけ」瑞穂町社協の企画・経営委員として参加。収入源の創出の難しさを知り、当法人でできることを提案。

「周知」 事業計画に反映

「準備内容」厨房との調整、社協窓口担当者との打ち合わせ

「実施頻度」毎月

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年6月・7月・8月・9月・10月・11月・12月、2023年1月・2月・3月

【実施にあたっての工夫】

法人内のごみを資源へ転用。

担当者にお届けするところまでを、認知症ご利用者様に担って頂くことで、地域貢献をご利用者様に実感して頂き、「働きがい」へつなげることへの工夫。

実施にあたってのコロナ禍の影響

なし

コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○社協

実施主体

自施設・事業所

No.4

あきる野市

デイサービス

調査時点で実施予定

あきるのルピア塾

あすなろみんなの家

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

あきる野ルピアが行っている社会教育・生涯教育活動等の活動メニューを、当施設を会場として施設利用者や近隣住民を対象として開催。
現在のところ、健康体操や手芸等のメニューを検討中。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

今のところ実施時期は未定(年度内予定)

【実施にあたっての工夫】

検討中(対象者、人数の絞り込み、当日の体調確認など)

実施にあたってのコロナ禍の影響

昨年度より企画案はあったものの、度重なる感染拡大により、現在まで実施に至らなかった。
利用者と近隣住民が一緒に活動するのは難しい状況にある。

コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○商店(会)や企業

実施主体

他機関・団体等

原小宮ふれあいお茶飲み会

あすなろみんなの家

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

施設所在地である、あきる野市原小宮地区の高齢者を対象とした交流会。

例年は年2回程度実施。

昼食をしながら、ゲーム等のレクリエーションや簡単な講座を実施。

※施設を会場として貸し出し、昼食(有料)やレクリエーション等のために設備備品を提供。テーマによっては講師等としても協力している。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

今のところ実施時期は未定(年度内予定)

【実施にあたっての工夫】

感染対策の詳細については検討中。

飲食については、少なくともアルコールは難しいのではないかと考えている。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍によりここ2年間は協力(会場・食事の提供)ができていなかった。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○自治会・町内会(※自治会連合会含む) ○その他(原小宮ふれあい福祉委員会)

実施主体

他機関・団体等

No.6

あきる野市

特養

調査時点で実施

近隣のゴミ拾い

増戸ホーム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

コロナ禍で地域の人を集めての取り組みが出来なくなり、地域貢献委員会で話し合い、近隣のゴミを拾う活動を行うようになった。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年6月、11月

【実施にあたっての工夫】

密にならないように間隔を取って実施した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

影響はない。

コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

No.7

あきる野市

特養・養護

調査時点で実施

地域合同防災訓練

増戸ホーム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

協定に基づいて近隣施設、自治会と取り組んでいる。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年、2022年10月

【実施にあたっての工夫】

毎月1回近隣施設、自治会と顔合わせを行っている。

実施にあたってのコロナ禍の影響

人数制限をして取り組んでいる。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

- 近隣の施設・事業所
- 自治会・町内会(※自治会連合会含む)

実施主体

他機関・団体等

No.8

羽村市

特養

調査時点で実施予定

町内防災訓練

特別養護老人ホーム羽村園

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

消防署指導の下、地域の方々と消火訓練等を行い、地域とのつながりを図っていく。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2023年1月

【実施にあたっての工夫】

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○自治会・町内会(※自治会連合会含む)

実施主体

他機関・団体等

学習支援「神明台自習室みらい」

社会福祉法人亀鶴会 特別養護老人ホーム神明園

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

○対象者:近隣中学校の生徒限定

○取り組みのきっかけ:地域福祉ニーズに積極的に対応してゆくため、2018年より公益的取り組みを展開。推進委員会を設置し、検討を重ねて来た。学校関係者やPTAとの意見交換から「テスト勉強に集中できる安心した環境が地域にほしい」というニーズが挙がり、施設敷地内にある「神明台sTorehousue」(防災倉庫兼公益事業活動拠点)の一室を自習室として開放している。

○周知、集客:近隣中学校の協力のもと校内ポスター掲示や生徒へ申し込み書の配布を行っている。

○準備内容:ポスターや配布物の準備、申し込み受付
ボランティア(学習支援、食事準備)の募集

○当日の実施内容:16:30～(土曜日、試験期間中は15:00～)、20:00自習室開放
学生ボランティアがいる日は学習支援付き自習室
18:00～18:45 夕食
進路相談などお兄さん、お姉さんと楽しいおしゃべり時間にもなっている。

○実施頻度:各期考査の1週間まえから考査最終日前日まで

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年6月,11月、2023年2月

【実施にあたっての工夫】

○食事を提供する事でボランティア、違う年代の人と会話を楽しむ、交流の場にもなっている。
○大学教諭である法人理事の指導のもと、開催後に利用した本人へ利用した感想等アンケート調査を実施し、効果評価・見直し行なっている。地域の居場所作りを主旨とした研究の一環としても実施している。

実施にあたってのコロナ禍の影響

感染対策の観点から実施ついて自粛せざるを得なかった。活動を再開しても、自習室が密にならないよう定員を減らした。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

放課後の居場所作り「かふえてりあ はろ」

社会福祉法人亀鶴会 特別養護老人ホーム神明園

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

○対象者:

近隣の小中学生限定。小学生は3年生からとしているが、兄弟が一緒であれば1年生ら利用可能としている。

○取り組みのきっかけ:

地域福祉ニーズに積極的に対応してゆくため、2018年より公益的取り組みを展開。推進委員会を設置し、活動内容の検討を重ねて来た。

学校関係者や地域住民との意見交換から「暗くなっても公園やコンビニ前にいる子どもをよく見掛けるようになった」「子どもだけで食事を摂る家庭が多くなっている」などあがった問題に対し、解決への取り組みの一つとして食事付き放課後の居場所を開設した。

○周知、集客、実施方法:

近隣小学校の協力のもと校内ポスター掲示や生徒へ申し込み書の配布を行っている。定員12名の予約制としている。

○当日の実施内容;

・16:30～19:00 来る時間、帰る時間は自由。活動スケジュールを立てているが、好きな事をする場としている。

・18:00～ 夕食

食事準備、こどもの見守りで毎回3～5名のスタッフで対応している。

○実施頻度:毎週火、土曜日(週2回開催)

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

・開催場所である“神明台sTorehouser”は公益事業活動の拠点であり、地域の防災倉庫、炊き出し設備備えた建物であるため、誰もが利用できるというオープンさも大事に活動している。

・居場所の必要な子どもが継続して利用ができるよう、週2回と開催頻度を多くしている。

・売れ残った野菜等の材料を提供頂いている。活用できる地域資源を見つける、使う。又他団体と協力体制を築くことも目的に活動している。

実施にあたってのコロナ禍の影響

感染拡大があった夏には1ヶ月半活動を中止した。特養の入居者へ感染を持ち込んではいらない、広げてはならないため慎重にならざるを得ない事が多く、活動を継続する難しさを痛感している。

コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

きよせ10の筋トレ

きよせ清雅地域包括支援センター

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

「対象者」

- ・地域に住む高齢者を対象に、福祉医療系の専門家が取り組む介護予防のプログラム。

「取り組みのきっかけ」

- ・市内に元気高齢者を増やし、外出の機会やコミュニケーションの機会の創出も兼ね取り組みがスタート。
- ・都内で先に実施している自治体を見学し、清瀬市でも取り組むこととなる。

「周知・集客など」

- ・周知は、市内掲示板、チラシ、ケアマネ事業所、国保連データベースで対象となった方などへお知らせの送付。

- ・10の筋トレ体験会⇒身近な地域での出前講座⇒自主グループ立ち上げへ。

- ・地域住民、市内のリハ連絡会、行政、生活支援コーディネーターが連携し自主グループ立ち上げを行う。

「準備内容」

- ・会場の確保、当日資料の作成、広報活動。

「当日の実施内容」(体験会)

- ・生活支援コーディネーターが司会進行を行い、実際の筋トレはリハ連絡会からPTやOTが説明し実施。

- ・その後、自分の住む地域で活動を継続したい方で今後の打ち合わせ。

- ・各地域の活動場所で自主グループとして活動の開始。生活支援コーディネーターやリハ連絡会でフォロー。

「実施頻度」

- ・体験会は年3回、各生活支援コーディネーターは担当する地域で年3ヶ所の自主グループ立ち上げが行えるよう調整。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

- ・国保連データベースを活用したピンポイントの広報。

- ・10の筋トレの住民主体の自主グループ立ち上げに向けた生活支援コーディネーターやリハ職のフォローアップ。

- ・住民主体の活動となるよう側面支援、後方支援の実施。

実施にあたってのコロナ禍の影響

- ・公共施設や福祉施設を借りて実施する場合は、コロナの状況により会場確保ができなくなる点。

- ・コロナが出始めの時は、活動の中止や延期もあったが、活動場所を変更したり、人数が多すぎないように2部制で行うなど。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

- 同法人内の他施設・事業所
- 近隣の施設・事業所
- ボランティア(団体)・NPO

- 他種別事業所も含んだ、区市町村内の事業所等のネットワーク(地域公益活動推進に関連したネットワーク含む)

- 地域包括支援センター
- 自治会・町内会(※自治会連合会含む)
- 民生児童委員(※民児協含む)

- 商店(会)や企業
- 社協
- 小地域活動のネットワーク、協議体(生活支援体制整備事業)、地区社協等

実施主体

他機関・団体等

休み処(サロン)

きよせ清雅地域包括支援センター

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

「対象者」

・団地に住む方や近隣の方

「取り組みのきっかけ」

・団地に住む方より、夏の暑い日にクーラーがなく過ごす人がいることが心配と相談あり。夏の時期に「涼み処」の名称で毎週活動開始。夏が過ぎると「休み処」と名称を変え活動中。

「周知・集客など」

・JKKの住まいるアシスタントさんにも相談しながら活動へ。団地内の掲示板や市内ケアマネージャーへ案内。

「準備内容」

・活動場所の確保

・広報

・社協助成金申請の手伝い

「当日の実施内容」

・毎週月曜日の午前に開催。ゲームなどで楽しめるように準備。参加者で元カメラマンがおり、写真の展示など。

・主催者が防災のことに心配もあり、ポータブルトイレの利用の仕方など体験。看取りのことにも関心があるため、今後調整。

「実施頻度」

・毎週月曜日午前

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年7月・8月・9月・10月・11月・12月、2023年1月・2月・3月

【実施にあたっての工夫】

・住民主体となるよう側面支援、後方支援に努める。

・広報や助成金申請の手伝い。

実施にあたってのコロナ禍の影響

・特になし。検温、消毒、換気を行い実施。

・感染者数があまりに多くなれば、開催頻度など確認

コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○同法人内の他施設・事業所

○近隣の施設・事業所

○ボランティア(団体)・NPO

○地域包括支援センター

○自治会・町内会(※自治会連合会含む)

○民生児童委員(※民児協含む)

○社協

○小地域活動のネットワーク、協議体(生活支援体制整備事業)、地区社協等

実施主体

自施設・事業所

職場体験

デイサービスセンター風の樹

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他
(職場体験)

【取り組み内容】

9:00～15:30 3日間 中学生 3名を受入れ
 介護職(介護福祉士)・看護師職の職場体験(職員と同じ体験をして頂く)
 ※デイサービスの仕事内容
 アクティビティーゲーム 折り紙・トランプ・オセロ等のお相手など
 個別リハビリの実施・リハビリ体操の参加 等

初日の午後には認知症サポーター講習(オレンジリング)の受講。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年8月・9月

【実施にあたっての工夫】

連携を密にとる感染状況の把握と発信を行う。職場体験時は事前にPCR検査(施設負担)の実施を依頼している。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍以前から継続した取り組み

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

- 同法人内の他施設・事業所
- 学校・PTA

実施主体

自施設・事業所

地域懇談会

やまと苑

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

対象者:近隣地域の自治会やボランティアの方等と連携、実施内容:旬のテーマを選定、周知方法:ポスターやチラシの掲示や配布、自治会回覧板で回覧等によりお知らせ、実施内容:地域交流勉強会、頻度:毎月

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年12月、2023年1月・2月・3月

【実施にあたっての工夫】

長く継続している取り組みであるため、認知されている。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍で集まることができず、随時、再開を検討・調整している状況

コロナ禍以前から継続した取り組み

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

- 自治会・町内会(※自治会連合会含む)
- ボランティア(団体)・NPO
- 小地域活動のネットワーク、協議体(生活支援体制整備事業)、地区社協等

実施主体

自施設・事業所

初任者研修、実務者研修

こまえ正吉苑二番館

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

介護の仕事に興味がある。やってみたい。
 家族の介護に不安や心配がある。
 介護の仕事につき始めたが、基本的な事をきちんと学びたい。
 今後、介護福祉士の資格取得を目指したい。

少しでも介護に興味を持って頂く、介護の仕事のすばらしさを知って頂く、
 また、介護の仕事に自信をもってもらう為の学びの機会の場合として、
 初任者研修ならびに実務者研修の実施を行っています。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

実践を多く組み込んだ講義を中心とし、直ぐに活かせる知識を習得。
 遅刻や欠席などに対しても振替授業や課題レポートで対応。
 就職サポートと研修費用免除の制度あり。

実施にあたってのコロナ禍の影響

研修会場と研修生への感染予防対策の配慮としてルールを設けて運用している

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○同法人内の他施設・事業所

実施主体

他機関・団体等

畑交流会

特別養護老人ホーム浅川園

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

近隣の3つの保育園との交流 運動会の見学・敬老の日の交流・演芸発表会があったがコロナになりオンラインの演芸発表会の交流のみとなった。直接交流を持ちたいと考え苑内畑にジャガイモを育てジャガイモ堀りを行った。他に空豆・枝豆・里芋を植え実施した。利用者様がその様子を見学し交流機会を持った。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年6月

【実施にあたっての工夫】

1つの保育園が25人来るので収穫量の多い野菜を栽培した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

子どもと利用者様がお互いに感染しないように距離をとった。また、接触時間を5分以内とした。

コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○近隣の施設・事業所

実施主体

自施設・事業所

グッドタイム教室

合掌苑桂寮

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

2018年より地域に向けて情報発信や、地域交流を目的として開催しております。
 テーマによっては外部講師も招き地域高齢者に役立つ情報発信に努めています。
 2022年度は「食生活を見直して健康時長寿を目指そう」「元気に在宅生活を続けるために」「誤嚥性肺炎を予防しよう」をテーマに開催致しました。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年7月・10月・11月、2023年3月

【実施にあたっての工夫】

開催後にはアンケートに回答いただき、その内容を次回開催テーマに反映をさせています。
 また、開催後には支援センターへの相談や施設見学もお受けしております。

実施にあたってのコロナ禍の影響

2021年度まではコロナ禍で開催を見送っておりましたが、人数制限や消毒のご協力をいただきながら再開しました。コロナ明けのグッドタイム教室では、感染予防をテーマとしました。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

- 同法人内の他施設・事業所
 ○自治会・町内会(※自治会連合会含む)

実施主体

自施設・事業所

グッドタイム教室

合掌苑

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

高齢者支援センター、施設ボランティア等、地域の住民の方を対象に介護予防・健康・医療・暮らしに関するお役立ち情報を施設職員や近隣の関係者等が講師役を務め、年3回一時間半の内容で開催。内容については、開催時のアンケートやミーティングで検討。集客については、郵送案内や電話等で声掛けを行っています。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年7月・11月、2023年3月

【実施にあたっての工夫】

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍で2年間中止、今年は人数制限をして開催しています。以前は30名以上、内容によっては50名以上の方が参加されていましたが、コロナの感染予防対策として20～25名以内で実施しています。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

フレイル予防講座

安立園特別養護老人ホーム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

①熱中症予防講座

【対象者】地域の自治会

【募集方法】マンションの掲示板にチラシを掲示

【日程】2022年7月

②フレイル予防講座(3回シリーズ)

第1回「栄養について」講師・管理栄養士

【対象者】地域の自治会

【募集方法】自治会広報紙

【日程】2022年12月

※③第2回は2023年2月、第3回は来年度予定

④栄養についての講座

①の自治会で、2023年2月予定

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年7月・12月、2023年2月

【実施にあたっての工夫】

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○自治会・町内会(※自治会連合会含む)

実施主体

自施設・事業所

配食サービス

安立園特別養護老人ホーム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

【対象者】地域の自治会(約100世帯の都営団地)

【取り組みのきっかけ】自治会役員の方より、住民の多くは高齢者で、独居の方も多く、地域との交流を希望する声があったため。

【周知・注文】玄関ドアポストに自治会役員の方といっしょにチラシ(注文書)を配布

【準備内容】注文書配布→注文書集計→注文者に前日にお知らせを再度配布

【実施内容】特養厨房で調理した豚汁とおにぎりを園車で運び、自治会集会所で盛り付け、1セット100円で販売した。持ち帰り希望の方は集会所でお渡しし、お届け希望の方はご自宅までお届けした。

【実施回数】今年度、同じ自治会で3回実施

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年11月・12月、2023年2月

【実施にあたっての工夫】

注文された方が日程を忘れないよう、前日にチラシを配布した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

集会所での会食も可能であれば、住民同士の交流が深まるが、感染防止のためできない。

コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○自治会・町内会(※自治会連合会含む)

実施主体

自施設・事業所

介護予防体操

特別養護老人ホーム府中若松苑

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

地域住民やご利用者様のご家族様を中心に、介護予防体操を地域交流室にて開催

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年8月・9月・10月・11月

【実施にあたっての工夫】

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○同法人内の他施設・事業所

実施主体

自施設・事業所

ウェルカムフェスティバル

大洋園

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

対象者:小学生

取り組みのきっかけ:コロナ禍でも地域貢献について模索しているときに、PTAをしている当施設職員が小学校との間を取り持ってくれ、当施設のEPA職員(ベトナム)との交流の場ができた。

地域ニーズ:小中学校、高校では国際交流について学ぶ機会があり、当施設のEPA職員がその一翼を担えるのではと考えました。

当日の実施内容:ベトナム料理を小学生に振る舞い、ベトナムの伝統的な遊びを共に行い、異文化交流を果たせました。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年6月、2023年1月

【実施にあたっての工夫】

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍で当初の予定よりずれ込み実施となりました。

コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○学校・PTA

実施主体

自施設・事業所

青梅インター付近清掃活動

今井苑

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

青梅インター付近にゴミが散乱している箇所があるとご家族からのお話や職員からの声をもとに、毎月第3木曜日の1時間ほどの時間で施設職員4名とボランティア3名にて、青梅インター付近の清掃活動を約2年間実施している。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

施設に外部の方を及びするのではなく、施設職員が外に出て活動することで、コロナ禍においても継続可能な活動となっている。

実施にあたってのコロナ禍の影響

特に影響はありません。

コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○ボランティア(団体)・NPO

実施主体

自施設・事業所

とらいふマルシェ

とらいふ武蔵野

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

<対象者> 入居者、入居者家族、併設保育所利用の保護者、地域住民

<取組のきっかけや対応したいと考えた地域のニーズ>

コロナ禍で地域住民同士の交流や入居者・家族の交流が激減し、人とのつながりを求めているというニーズがある。とらいふあーむ事業(園芸活動を通して、入居者・家族・地域住民の居場所作りに貢献していくことを目的とした事業)を地域住民に周知する為に開催した。

<周知・集客・実施の方法>

・とらいふあーむ通信の発行

・集客のためのワークショップを実施

・とらいふあーむ事業開始時のクラウドファンディング返礼品送付時に案内を同封

・HP掲載

<準備内容>

・入居者家族にボランティアを依頼(ダンス、コーラス)

・近隣の就労継続支援B型事業所にパンの移動販売を依頼

・市民団体に食器リユースのブースを出展依頼

・タクティールケアの資格をもつ職員に体験ブース出展を依頼

・地域コミセンから備品を借用(テント、スピーカー)

<当日の実施内容>

・上記ボランティアの協力を得て、ブース出展(パン販売、食器譲渡、コーヒー販売、タクティールケア体験会)、パフォーマンス披露(カントリーダンス、アカペラコーラス)を実施した。とらいふあーむでの収穫実演を実施予定だったが、荒天のため中止した。

<実施頻度>

2-3回/年を考えている

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年11月

【実施にあたっての工夫】

・集客のため1ヶ月前から「とらいふあーむの木プロジェクト～願い事カード作ってとらいふあーむに飾ろう～」に取り組み、入居者・コミセン祭参加者や併設する保育所の園児・保護者や施設職員・家族にアプローチをした。合計111枚のカードが集まり、華やかなブースとなった。

・感染防止策のためゾーニングにより入居者と来場者の接触を避ける工夫をした。来場者に対して、感染防止に関する注意事項を事前に配布した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

・当日(11/23)が真冬並みの寒さと雨だったため、会場を屋外から屋内エントランスホール+屋根付テラスで行うように変更した。来場者と入居者を接触させないために、来場者に狭い風除室で観覧してもらう、出展者に長時間テラスでの屋外活動を強い形になり、負担となってしまった。

コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○ボランティア(団体)・NPO

実施主体

自施設・事業所

第6回八王子介護フェア

偕楽園ホーム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

11月11日の介護の日にちなみ、地域に開かれた施設・事業所として一般の市民の方々に、介護の大切さ、素晴らしさをご理解いただき、介護を身近に感じていただこうと開催し、記念講演をいただきましたとして、大学の教授による講座の他、認知症や看取りの体験をお話しいただいたパネルディスカッションの実施、企業ブースご出店による介護ロボットの体験やストレスチェック機器を用いたストレスチェックなどを行った。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年10月

【実施にあたっての工夫】

会場で密にならぬよう事前予約制にして人数の調整を行った。また、飲食は控えて、実施は13:00~16:00と長い時間にならぬように設定した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ前には、飲食なども行えたので、イベント以外に地域の方々に楽しめる機会を用意できたが、省く必要があった。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

○同法人内の他施設・事業所 ○近隣の施設・事業所 ○ボランティア(団体)・NPO
 ○他種別事業所も含んだ、区市町村内の事業所等のネットワーク(地域公益活動推進に関連したネットワーク含む)
 ○地域包括支援センター ○ボランティア(団体)・NPO ○社協

実施主体

自施設・事業所

夏休み工作教室WEB、大根掘り交流会

美山苑

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

○夏休み工作教室

法人内、各事業所から夏休み向け工作題材を用意し法人HP上に載せ、近隣の方々に期間限定で配信した。

- ①美山苑:UVレジンでヘアアクセリーを作ろう
- ②みやま大樹の苑:モザイクアートを作ろう
- ③優仁ホーム:ハーバリウムを作ろう
- ④事務局:ドライフラワーでのモザイクアートを作ろう
- ⑤美山デイホーム:竹水鉄砲を作ろう
- ⑥給食センター:牛乳パックでキューブパズルを作ろう

○大根掘り交流会

法人内、優仁ホームで育てた大根を先着100名に配布。(実際に体験して頂く)その他、作品販売、施設紹介を掲示した。地域の方々との交流を通じ、法人の取り組み内容を紹介した。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年8月(夏休み工作教室)・11月(大根掘り交流会)

【実施にあたっての工夫】

Webを活用し、コロナ禍であっても活動を継続できたこと。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○同法人内の他施設・事業所

実施主体

地域合同防災訓練

新浅川園

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

--

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

--

【実施にあたっての工夫】

--

実施にあたってのコロナ禍の影響

--

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○同法人内の他施設・事業所

実施主体

自施設・事業所

なぎさ☺フードドライブ

なぎさ和楽苑

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

(生活困窮者等への食材提供・フードロス対策)

【取り組み内容】

コロナ禍前に開催していた「なぎカフェ(コミュニティカフェ)」「なぎさ★キッチン(地域食堂)」が、特養施設内では開催できなくなり、地域の多世代の方とのつながりが残念ながら中断された。キッチンには一人で食事を摂っていると思われる子供や、困窮していると思われるひとり親の方等の参加も少数ながら見られており、施設柄、飲食提供や弁当配布等の取組は難しいが、フードロス対策と共にフードドライブ・フードバンクの両方の役割を果たせたらどうか、と考えた。特に当苑が担当している地区にはフードバンクがなく、遠方まで取りに行く方の負担も大きいとの声を相談業務の中で確認していた。施設出資の他、助成金等も一部活用しながら、食材を購入し配布。施設内外周知(コミュニティペーパー掲載・SNSツール・ポスティング他)を実施する中で、食材提供協力者も増えてきた。食材を求める方も15組、50人程度、世代もまんべんなく利用者がいる状況。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年5月・7月・11月・12月、2023年3月

【実施にあたっての工夫】

条件は設けず、希望のある方へお渡ししている。リピーターも多く、やりとりする職員を固定し、継続して接することで伝えてくれる情報を整理し、ニーズの把握を行っている。コロナ感染を契機に体調を崩している、コロナ禍で失業した、等と身の上を話してくださる方も多く、コロナ情勢での課題も確認している。

実施にあたってのコロナ禍の影響

本来は「パントリー」のスタイルをとりたいが、施設内の入館に限界があり、世帯の状況を伺いながら、食材を詰め合わせている。

コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取組み

複数の機関・人等と連携・協働した取組み

<連携・協働先>

○商店(会)や企業
○社協

実施主体

自施設・事業所

オレンジカフェ

東四つ木ほほえみの里

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

蔓延防止期間など大人数が集まらない時期には、参加者が自由に会場に来て、短冊に思いを書いて伝言板に掲示する形式で、行った。10月以降は、人数を減らしてオレンジカフェを実施している。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年4月・5月・6月・7月・8月・9月・10月・11月・12月、2023年1月・2月・3月

【実施にあたっての工夫】

三密を防ぐことを念頭に実施。

実施にあたってのコロナ禍の影響

参加人数が減っている。

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

- 自治会・町内会
- 民生児童委員(※民児協含む)
- ボランティア(団体)・NPO

実施主体

自施設・事業所

谷在家さくらマルシェ、地域との防災訓練、さくらサロン、 野菜即売会(施設敷地無償貸出)、皿沼さくら市(施設敷地無償貸出)、介護相談

特別養護老人ホームさくら

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

○谷在家さくらマルシェ

・地域で活動する様々な団体様に施設敷地の一面を無償提供し、野菜や焼き芋、シフォンケーキ、アクセサリーなどの即売市場(マルシェ)を行っています。施設職員たちは、買物に来られた子どもたちや親御さんたちの休息所としての「キッズ・ベビーコーナー」を設け、近隣の図書館の職員の方に絵本の読み聞かせを行ってもらい、またボランティアの方に英語でのレッスン「英語でビンゴ」をしていただいたり、施設職員が射的やポッチャなどのゲーム企画を行ったりしています。子どもに限らず、ボランティア部の中学生、ふらりと立ち寄った大学生、近くの団地に住む高齢者など、多世代交流の場となっています。

○地域の防災訓練

・地域の消防署や町会と協働して、施設敷地にて消火器訓練や車椅子での避難訓練を行っています。

○野菜即売会、介護相談

・子ども食堂の支援を目的とする地域団体様に施設敷地を無償提供し、毎週木曜日に野菜即売会を行っています。市価よりも少し安いお手頃価格のため、開店前から行列ができ、顔なじみの方同士で会話が弾むなど、地域交流の場にもなっています。
・その場に、「介護相談」として施設職員がスタッフとして参加し、重い買い物かごを代わりに持つなどのお手伝いしながら、来場した方たちにお声かけをしています。顔なじみの関係づくりを第一に、ほろりとこぼれる生活のお困りごとに耳を傾け、必要に応じて関係機関へつなぐなどしています。

○皿沼さくら市

・おにぎりやベビーカステラなどの軽食キッチンカーに施設敷地を無償提供し、施設ご利用者や地域の方たちへ買物の機会提供を行っています。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

地域の方にとって、施設が「なじみのない、入りにくい建物」から「立ち寄ったことのある、なじみのある場所」になることを大事にしています。高齢者福祉事業(特養)と障害者福祉事業を行っているので、それ以外の多種多様な多世代の方たちにも気軽に立ち寄っていただけるよう、各種団体様と協力し、敷居の低い・誰でも参加できる・楽しい催しやイベントになるよう、プログラムなどを工夫しています。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ流行時期は開催を中止するなどの影響がありましたが、各種の催しやイベントを楽しみにされている方たちが多くいらっしゃるため、感染対策を徹底するなどして、なるべく中止にならないよう、流行状況を注視しながらその都度対応を行っています。

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○同法人内の他施設・事業所 ○近隣の施設・事業所 ○地域包括支援センター
○自治会・町内会(※自治会連合会含む) ○学校・PTA ○ボランティア(団体)・NPO

実施主体

他機関・団体等

近隣の幼稚園とのオンライン交流会

田柄デイサービスセンター

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

新型コロナ拡大により、地域のボランティア団体や幼稚園等の対面での交流を行うことができない状況にあった。
一方で、感染予防への対策を強化していることでデイサービスも閉鎖的になり兼ねないという危惧もあったため、
継続した交流がもてるよう、地域の幼稚園と「zoom交流会」を行うこととした。
内容としては園児に歌の披露に加え、クイズや「同じ同じゲーム」(着ている服の色など共通点を見つけあうゲーム)などを行うものとした。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年4月・9月・12月

【実施にあたっての工夫】

・高齢者にとっては慣れない画面越しでの交流であるため、園児による一方的な発表にならないよう担当者同士で「交流」になる内容を検討した。また、「同じ同じゲーム」のように共通点を持てることで交流の場にも一体感が生まれるように工夫をした。
・5月の交流会では、園児が作成した手持ちサイズの「鯉のぼり」デイサービス利用者が手でもって交流することで子どもの目線からもつながりを感じることができるよう意識した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

この3年間はzoom交流という形でコロナの影響を受けていましたが、この取り組みにも慣れてきたため、2023年度からは、感染状況が落ち着いていけば対面で行い、感染拡大時はzoomと使い分けていくこととなり、
結果としては、交流の選択肢が広がる取り組みとなった。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○近隣の施設・事業所

実施主体

自施設・事業所

No.32

練馬区

特養

調査時点で実施予定

ワクチン接種会場

特別養護老人ホーム上石神井幸朋苑

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

訪問サービス事業所のワクチン接種会場として、施設のホールを無償貸出

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年12月

【実施にあたっての工夫】

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○近隣の施設・事業所

実施主体

自施設・事業所

No.33

板橋区

特養

調査時点で実施・実施予定

防災訓練・食からつながるプロジェクト(予定)

ゆめの園りあん若葉 特別養護老人ホーム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

食からつながるプロジェクト

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年11月、2023年3月

【実施にあたっての工夫】

室外で実施

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

麻雀サロン、自治会合同防災訓練、ぽっぽカフェ、オレンジカフェ

新町光陽苑

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

●オレンジカフェについて(新町光陽苑地域包括支援センターで実施)
 認知症になっても住み慣れた地域の中で生活を送ることができるよう、地域の支えあいを進める交流活動の場です。
 認知症の正しい情報案内のほか、認知症に関する相談もおこなっています。
 認知症の本人やその家族、地域の方など、誰でも気軽に参加できます。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年4月・9月・10月・11月・12月、2023年1月、 毎月(オレンジカフェ)

【実施にあたっての工夫】

●オレンジカフェ:医師や歯科医師、臨床心理士、作業療法士による相談もおこなっています。

実施にあたってのコロナ禍の影響

高齢者施設内での活動となりますので、予防対策を継続しておこなっています。

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

- 自治会・町内会(※自治会連合会含む)
- 民生児童委員(※民児協含む)
- 学校・PTA

実施主体

自施設・事業所

朝活

東京都北区桐ヶ丘やまぶき荘地域包括支援センター

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

地域調査をもとに主に高齢者の低栄養や食事内容の偏り、孤食、交流の場の創設を目的として屋外での体操や手作り品の販売、参加している専門職に相談できる場として実施。

【対象者】地域住民誰でも

【周知】チラシは作成しているがほとんど口コミで広がっている。

【準備内容】なし※イベントの時は事前打ち合わせあり

【実施頻度】週1回

【その他】参加者によって複数の目的を有した場となっている、申し込みや予約の必要がなく誘いやすい

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

活動を屋外に移した

実施にあたってのコロナ禍の影響

販売は密になりやすいので声掛けが必要

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○近隣の施設・事業所 ○他種別事業所も含んだ、区市町村内の事業所等のネットワーク(地域公益活動推進に関連したネットワーク含む) ○民生児童委員(※民児協含む) ○学校・PTA ○ボランティア(団体)・NPO
○商店(会)や企業 ○社協 ○小地域活動のネットワーク、協議体(生活支援体制整備事業)、地区社協等

実施主体

認知症カフェ

菊かおる園

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

- ・地域の独居高齢者
- ・孤立防止
- ・現在は特定メンバーに電話で声掛け。包括との連携によりメンバーの新規加入あり。
- ・紙パック飲料、お菓子
- ・体操、ゲーム、手作業、コンサート、介護予防に関する講話など
- ・毎月1回(コロナ前は月2回)

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年4月・5月・6月・9月・10月・12月、2023年1月・2月・3月

【実施にあたっての工夫】

- ・お互いの顔と名前が分かるアットホームな雰囲気作りに努める。
- ・プログラムの押しつけにならないよう配慮し、参加者の自主性の尊重する。

実施にあたってのコロナ禍の影響

- ・人数制限(5~7名)
- ・飲食物の提供方法変更(以前は喫茶コーナーのコーヒーと手作りお菓子等であったが、紙パック飲料と個包装のお菓子に変更)

コロナ禍以前から継続した取り組み

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○地域包括支援センター

実施主体

自施設・事業所

杜のカフェ(認知症カフェ)

特別養護老人ホーム 千川の杜

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

認知症カフェとして

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年4月・5月・6月、2023年1月・2月・3月

【実施にあたっての工夫】

実施にあたってのコロナ禍の影響

規模を縮小した。(予約制)
 活動場所を変更した。(事業活動の為、使用していた場所が使用できなくなってしまった為)
 条件付き(ワクチン、バイタル確認等)活動となってしまった。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

「介護予防教室」「若年性認知症の集い」「防災教室」

特別養護老人ホームフェニックス杉並

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

- 他種別事業所も含んだ、区市町村内の事業所等のネットワーク(地域公益活動推進に関連したネットワーク含む)
- ボランティア(団体)・NPO

実施主体

地域の居場所 パールライフ

デイサービスセンターパール鉢山

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

対象者:地域に住む高齢者・障がい者 など
 高齢化社会を迎え、健康寿命の延伸や介護予防の取り組み、高齢者の居場所づくりなどが必要とされている。また、様々な病気、鬱、認知症になりやすいと言われる『孤食』も問題となっているが、こうした課題は公的サービスでは対応できないこともあり、高齢者の方々が元気に生活していくためにも、地域を主体に、地域力を生かした活動に取り組んで行く必要性が高まっている。
 コロナ蔓延以前は、毎週月曜から金曜日、体操や趣味活動、食を通して参加者の交流を図っていた。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

趣味活動を多彩に用意し、自分の好きな活動を行っていただけるように準備した(書道・茶道・コーラス・英語・日本画・麻雀 など、約10種類の活動。講座によっては専門講師をお招きした)。また、地域住民に、当日の運営等のお手伝いをしていただき、ボランティアサポーターを依頼した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ蔓延に伴い活動を中止せざるを得なかった。緊急事態宣言解除や感染者減少を受けて活動再開するも、すぐにコロナ陽性者増加のため継続的な活動ができなかった。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

小学生への車イス体験授業

デイホーム桜丘

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

小学4年生、総合的学習での単元「福祉」への授業協力。
 小学校に職員が出向き、車イス体験授業を行う。
 高齢者、障害者への理解、バリアフリーへの理解を深める。
 4クラス(4回)実施。車イスは施設から持ち込み。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年10月

【実施にあたっての工夫】

車イスの消毒等、感染予防に配慮した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

毎年行ってきたが、コロナで中断。今年、3年ぶりに実施した。

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○学校・PTA

実施主体

自施設・事業所

地域向け勉強会

砧ホーム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

全3回の実施のため、相談・ケアマネ部門、介護・機能訓練部門、看護・栄養部門でテーマを設定し開催している。
 相談・ケアマネ部門では、入所の相談窓口として申し込みや特養についてを知っていただくための内容を軸に開催。
 介護・機能訓練部門では、移動移乗に関連する内容を中心に行っている。
 看護・栄養部門では、開催時期が真夏のため、脱水や熱中症予防に関して開催することが多い。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年6月、7月、10月

【実施にあたっての工夫】

参加者の反応を見ながら、要所要所で掛け合いのように進行する場合と、一旦講義を進める場合と、臨機応変に対応している。

実施にあたってのコロナ禍の影響

地域の掲示板でお知らせをしたものの、参加控えがあったように感じる。参加のお問い合わせがなく、極少人数での開催となった。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

特になし。事業所単体での開催。

実施主体

自施設・事業所

どんと焼きの藁回収

デイサービス博水の郷

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

今年で34回目のどんと焼きに向けて、施設地元町会で毎年藁回収を行っていました。1月上旬の寒い時期に河川敷で回収する事と、町会の高齢化に伴い参加している人が、減ってきました。そこで、若い職員がいる博水の郷から回収に参加させて頂きました。町会の方々と一緒に作業することで信頼関係が深まったと思います。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2023年1月

【実施にあたっての工夫】

職員に公募し、参加者が多くいた。
とても寒い事と法人PRで、法人ジャンパーを着用した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○民生児童委員(※民児協含む)
○商店(会)や企業

実施主体

響会YouTube

好日苑

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

コロナ禍にて高齢者サロンを中止。かわって介護予防を中心とした動画配信を開始した。

- ①楽しくエクササイズ
 - ②東理学療法士のストレッチ編
 - ③東理学療法士の筋トレ基礎(下肢編)
 - ④東理学療法士の筋トレ基礎(上肢編)
 - ⑤大内言語聴覚士のお口の体操
 - ⑥清野先生のフレイル予防講座
 - ⑦今井さんの「運動する時の姿勢」&「足の裏側のストレッチ」
 - ⑧今井さんの「楽しくエクササイズ:脳トレ①」
 - ⑨穴澤管理栄養士の栄養講座
 - ⑩荒井さんのおはよう運動
- 以上、10の動画配信を行っている。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

動画作成に当たっては、法人内職員だけではなく、他機関職員の協力を得て内容を作成した。対象者(高齢者等)に、動画を見てもらえるよう、スマホ相談会・スマホ講座を、地域包括支援センターやシニアステーションにて開催し、YouTubeの閲覧方法を説明する等の働きかけを行った。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み
 コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

- 同法人内の他施設・事業所
- 近隣の施設・事業所
- ボランティア(団体)・NPO
- 他種別事業所も含んだ、区市町村内の事業所等のネットワーク(地域公益活動推進に関連したネットワーク含む)
- 地域包括支援センター
- 社協

実施主体

自施設・事業所

講座「特養での生活とは」開催

さんホーム目黒

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

毎年11月11日介護の日に法人施設同時に特養についての説明会及び施設見学会を実施している。特養への理解を深めていただくこと、将来入居を考えている方への参考にしていただくことを目的としている。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年11月

【実施にあたっての工夫】

工夫ということではないが、毎年11月11日の介護の日に合わせて実施し、「介護の日」を知っていただくことも目的の一つとしている。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍前は送迎車で法人施設を回ることをしていたが、一昨年より各施設でのみ実施。コロナ禍で居室等の見学はしていただけない為、映像を見せること、見学は共有部分に限ることで対応している。

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○同法人内の他施設・事業所

実施主体

自施設・事業所

No.45

目黒区

特養・デイサービス・その他

調査時点で実施(中断)

家族介護教室、会食サービス

目黒区立特別養護老人ホーム東が丘

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

介護に興味のある地域住民を対象に食事・移動・ベッド上での介助方法等を説明し、体験してもらう。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年10月、12月

【実施にあたっての工夫】

実施にあたってのコロナ禍の影響

昨年度はリモートで実施した。

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○自治体

実施主体

自施設・事業所

健康カレンダーの送付

目黒区立特別養護老人ホーム東山

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

会食サービスを休止しているなか、何か地域の方に向けて情報の発信や交流の機会が持てないかと考えて開始した

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

通年

【実施にあたっての工夫】

近隣の老人クラブや民生委員や町会の方に協力を依頼し活動の宣伝

実施にあたってのコロナ禍の影響

「みんなで集まって何かしてほしい」というニーズには応えられていない

コロナ禍でもできる取り組みを検討して実施

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

心のつながり 地域とともに 2022

社会福祉法人品川総合福祉センター(かえで荘)

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

対象者:地域区民、本部駐車場にて、10月23日(日)午前中実施。法人設立40年、地域とのつながりを確認し、昨年の同イベントよりも、更に区民の役に立てること、感謝の気持ちを伝えられるような内容を企画。コロナ禍、さまざまな辛いことに我慢をしながら生活をしている皆様の役に立てるように。
 内容:①40周年を迎える当法人にメッセージや要望を記入していただき、②書いてくださった方に先着200名様に野菜&果物の詰め合わせプレゼント。③障害者手作り作品販売。④ヨーヨー釣り、⑤子供にお菓子プレゼント。①のメッセージカードは11月から12月、当法人本部ロビーに掲示。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年10月、11月、12月

【実施にあたっての工夫】

現場の職員(介護員・支援員)が、コロナでご利用者支援の状況を優先し、現場職員の手を借りずに事務局の職員中心に人員を組んだ。企業ボランティアの助けを借りて、前日の準備・当日の人員を配置した。

実施にあたってのコロナ禍の影響

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み
 コロナ禍のニーズに応じて実施している新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○同法人内の他施設・事業所
 ○ボランティア(団体)・NPO

実施主体

自施設・事業所

地域祭礼

品川区立中延特別養護老人ホーム

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

例年9月第二日曜とその前日に開催させる「旗が岡神社例大祭」。感染症の影響により2年間休止したが、今年度は感染症予防策を講じ規模を縮小して開催となった。
 地元町内会の神輿渡御が実施されるなか、子供神輿・山車の渡御に合わせ施設入所者、地域の高齢者が子供達との交流の場を持った。出発・到着地点を当事業所前として、高齢者から子供たちにエールを送った。出発時は子供たちも緊張と気恥ずかしさで声を出すことができなかったが、高齢者の「ワッショイ！ワッショイ！」の声援に段々と声も大きくなり元気いっぱい渡御を行うことが出来るようになった。

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年9月

【実施にあたっての工夫】

地元町内会の担当者と事前打ち合わせを実施。コース、時間の確認等を行う。
 マスク着用のため声が通りにくいことを想定し、鳴り物楽器を使用して盛り上げた。

実施にあたってのコロナ禍の影響

マスクの着用は必須を考え、マスクを外す必要のある行為は避けた(飲食関係)。コロナ禍でなければ、屋台風のお楽しみイベント(かき氷、ジュース、綿あめ等)を実施し高齢者と子供の更なる交流が行えた。

コロナ禍の状況等に応じ、実施方法を見直すなどして継続(または再開)している取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

○自治会・町内会(※自治会連合会含む)

実施主体

他機関・団体等

介護家族教室・防災訓練・介護の日・看護の日イベント

介護老人福祉施設あじさい

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

「対象者」

・地域住民・町会

「地域ニーズ」

- ・地域での認知症に対する関心と不安が多い
- ・防災活動については地域との共助が必要の為、町会との防災訓練を実施

「実施内容」

- ・認知症についての基礎知識
- ・認知症予防の食事
- ・地震、水害時の避難訓練の実施

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

(調査時点で実施を予定)

【実施にあたっての工夫】

- ・参加しやすい場所と時間で実施
- ・町会との連携を密にする

実施にあたってのコロナ禍の影響

地域住民の方々との交流は中止している

コロナ禍以前から継続した取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

介護サロン(特別養護老人ホームとは)

フレスコ浅草

介護予防・高齢者支援

アウトリーチ(訪問活動)

相談・家族支援

カフェ・居場所・地域交流

学びの機会

情報発信

防災

その他

【取り組み内容】

「対象者」:近隣住民

「取り組みのきっかけや対応したいと考えた地域ニーズ」:施設に問い合わせがあり、施設ではどんなことをしているのか知りたいとの要望があった。

「周知・集客・実施の方法」:居宅ケアマネ

「準備内容」:パンフレット

「当日の実施内容」:対面による説明、見学会

「実施頻度」:年1回

【実施月】 ※2022年度内、アンケート回答時点の状況

2022年12月

【実施にあたっての工夫】

検温、ソーシャルディスタンス

実施にあたってのコロナ禍の影響

少人数での開催

コロナ禍とは関係なく地域ニーズに応じた新たな取り組み

施設・事業所単独での取り組み

複数の機関・人等と連携・協働した取り組み

<連携・協働先>

実施主体

自施設・事業所

第2章

つながれ ひろがれ 地域の輪 in TOKYO
ワーキングチーム座談会

「つながれ ひろがれ 地域の輪 in TOKYO の
これまでとこれから
～コロナ禍の地域や福祉施設・事業所への影響と
これからに向けて～」

座談会の開催にあたって

東京都社会福祉協議会 東京都高齢者福祉施設協議会の特別委員会の一つ、地域包括ケア推進委員会に設置された「つながれ ひろがれ ちいきの輪 in TOKYO ワーキングチーム」では、本報告書の作成・発行にあたり、座談会を開催しました。

高齢者福祉施設・事業所にとっては、コロナ禍の約3年間は、高齢者やその周りにいるご家族、職員の命を守ることを最優先に、大きな影響や変化を受け入れることを余儀なくされた期間でした。人と人とが触れ合ったり、つながったりすることが難しかった影響で、長く紡いできた施設・事業所と地域の方や団体との関係性も途切れたり、変化したりしています。本ワーキングの呼びかけで毎年行ってきた、高齢者福祉施設・事業所が地域のニーズに応え、地域とつながる取り組みを都内一斉に実施する「つながれ ひろがれ ちいきの輪 in TOKYO」キャンペーンも、この3年間、開催できない状況となりました。

令和5年5月8日以降、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけは2類から5類へ移行しました。社会の大きな変化の中で、本座談会では、これまでの取り組みや、コロナ禍での福祉施設・事業所や地域への影響や変化を振り返り、with コロナ・after コロナの今後に向けて、どのように取り組み、展望していくかを語り合いました。

福祉施設・事業所が地域とつながる方法を模索する方に、ご参考にいただければ幸いです。

【座談会参加者一覧（敬称略）】

<ワーキングチームリーダー・座長>

- ・あすなろみんなの家（デイサービスセンター・あきる野市） 今 裕司

<メンバー>

- ・品川区立中延在宅介護支援センター、品川区中延在宅サービスセンター 小山 正子
- ・豊島区立高田介護予防センター 相澤 和彦
- ・東大和市高齢者ほっと支援センターいもくぼ 長谷川 栄司
- ・府中市地域包括支援センターあさひ苑 清野 哲男
- ・府中市立介護予防推進センター 沼尾 治巳
- ・東京都民生児童委員連合会事務局（東京都社会福祉協議会民生児童委員部） 藤野 真琴
- ・東京ボランティア・市民活動センター（東京都社会福祉協議会） 榎本 朝美

※当日の欠席者も含めた委員一覧は巻末に掲載しています。



※次ページ以降は、令和5年5月12日に開催した座談会の模様を一部整理し、収録したものです。参加者の肩書や発言の内容は、当日の状況に基づきます。

「つなぐれ ひろぐれ ちいきの輪 in TOKYO」キャンペーン実施の背景と目的

今 この座談会を始めるにあたり、私たちが取り組むキャンペーンの開始のきっかけなどを少しお話ししておこうと思います。

この「つなぐれ ひろぐれ ちいきの輪 in TOKYO」というキャンペーンは、平成 28 年度(2016 年度)からスタートしました。きっかけとして、社会福祉法人に対する世間からの強い風当たりというものがありました。当時は、社会福祉法人がお金をため込み過ぎているのではないかという実態とはそぐわない批判や、非課税法人であれば地域に向けた社会的ニーズにもっと積極的に関わるべき・貢献すべきではないかといったような議論が盛んに行われていた時期です。社会福祉法改正が平成 29 年に予定され、「地域における公益的な取り組み」が社会福祉法人の責務として挙げられるというような社会情勢がありました。

その際の私たち、東京都高齢者福祉施設協議会（以下、「高齢協」という。）としての課題意識、内向きな反省点の1つとして、社会福祉法人の役割として、いわゆる本業である福祉・介護のサービスの提供だけではなく、地域にある様々な福祉のニーズに対して積極的に関与していく・貢献していく取り組みを推進していかなければいけないのではないか、という点がありました。一方、そうした取り組みを今

まで全くやっていなかったということではなく、多くの施設・法人で様々な取り組みを行っていた状況があります。しかし、そのことがしっかりと地域の方々や行政には伝わっていなかった、もしくは、私たちが積極的にPRをしてこなかったのではないかと、ということも、もう1つの課題としてありました。

そうしたことを出発点として、私たちは、地域のニーズに対する取り組みを積極的に進めていこうと会員施設・事業所に対して投げかけました。また、取り組みを取りまとめて地域や関係機関の方々に知らしめていくことを目的として、キャンペーンという形でスタートすることになりました。



今 平成 28 年度以降、毎年およそ 120 の取り組みが、このキャンペーンに参画されました。報告書にまとめたり、参考にするために見学会を行ったり、事例報告会を行ったりしてきました。

4年間、キャンペーンを継続しましたが、令和 2 年度(2020 年度)から新

型コロナウイルス（以下「コロナ」という。）が蔓延しました。高齢者施設・事業所は感染対策が最も求められる種別でもあることから、地域への取り組みも断念せざるを得ない状況があり、キャンペーンを中止せざるを得なくなりました。様々な施設・事業所で従来行っていた取り組みの大半が中止や見直しに追い込まれました。

ただ、むしろ、地域に対してのいろいろな取り組みの必要性は、徐々に増してきています。例えば子ども食堂などの子どもや家庭への支援、高齢者の閉じこもり防止や認知症予防など、介護知識や情報の普及・啓発、また、地域の町会・自治会、その他様々な社会資源と協働した取り組みの必要性を実感しています。そうした取り組みには成果も上げられてきたところでした。コロナ禍で中断してしまったものの、そうした成果をどのように活かしていくかが、令和2年度以降の非常に大きな課題だと思います。

その中で私たちは、令和2年度に、コロナ禍における取り組み状況や課題を抽出するためのアンケート調査を行いました。そして、令和4年度

（2022年度）にももう一度、取り組み状況を把握し、新たなヒントを得るためにアンケート調査を行いました。

本日は「つなひろ」のワーキングチームのメンバーとこれまでの取り組みを振り返ります。あわせて、アンケート調査の中から見えてきたことなどを

中心に、今後の展望等についても様々なご意見をいただきたいと思います。ぜひよろしくお願いいたします。



今 裕司さん

コロナ禍で変わってしまったこと

今 早速ですが「コロナ禍で変わってしまったこと」として、何かお感じのことはありますか。先ほど申し上げたように、地域に向けた活動の停止・停滞がありました。アンケートから見えるもの、また、皆さんの所属先等で感じる課題について、ご発言をいただきたいと思います。

清野 この取り組みを最初に始めるとき、「なぜ社会福祉法人がこのキャンペーンに取り組むのか」という目的として示されていたのは、「地域でこぼれ落ちる人がいないよう、誰もが安心して暮らせるまちを目指して、高齢者福祉施設・事業所が地域に寄り添うことで『ちいきの輪』をつくります」という、とてもすてきな言葉でした。この誘いの言葉にたぐり寄せられるように

して集まったメンバーでワーキングチームが組まれました。

この4年間の取り組みを通じ、それぞれの地域性を感じましたし、逆に普遍性というか、東京都内の中で、いろいろな場所でいろいろな法人が地域ときちんとつながっていることを見聞きできました。こういうすてきな4年間が、コロナをきっかけにある日突然変わってしまいました。自分は地域包括支援センター（以下、「包括」という。）の職員ですが、コロナの流行の間に、地域もすごく寸断され、老人会などはたくさん潰れてしまったり、町会も運営できなくなったりしたのを実感しています。年間行事で言うと、お祭りが地域をつなぐとても大きなものであり、それを特別養護老人ホーム（以下、「特養」という。）や包括や事業所と一緒に手伝ったりしてきたのが、できなくなりました。



清野 哲男さん

高齢者の問題に限って言うと、孤立死・孤独死がとても増えました。また今一番感じているのは、虐待や不適切

な状況にある家庭の増加です。ハイリスクな家庭、いわゆる「8050」や「認認」のご夫妻（夫婦がどちらも認知症の二人暮らし）の家庭などに、いままではもっと早い段階で私たちがたどり着けていたのが、地域の人との介在がなくなったため気づかれず、とても重篤な状態になってから行かなければならなくなってしまいました。

大したことはできないかもしれませんが、それぞれの地域にある社会福祉法人が、もう一度地域に手を伸ばして、地域の人たちと出会っていくこと。元気な高齢の方と私たちがつながることが、自分で助けてと言えない人にたどり着く近道になるのではないかなというふうに思っています。

小山 今まで、自分たちの施設に地域の人を招き入れること、「自由に、誰でも、いつでも来てください」ということは、特別なことではありませんでした。「サービスを使うために施設に来てください」ではなく、少し元気な高齢者で、介護も特に必要はないけれども、家にいても何もやることがないという人が、自分から、老人ホームの洗濯物を畳むのを手伝ったり、繕い物をしたりしてくださると言って、来てくださっていました。コロナ禍でそういう人たちを断らなければいけない状況になりました。その人たちの行き場がなくなってしまい、気がついたらこの3年の間に、要介護者としてデイサービスに通うようになってしまったとい

うことが、すごく残念な出来事でした。コロナで周りの人とつながれなくても、何かもっとできることがあったのではないかと、3年経ってから、もう少し違う方法が取れたのではないかと思う日々があります。



小山 正子さん

長谷川 コロナ禍になって一番大きな違いは、地域の方との出会いがなくなってきたということです。また、自分の市での状況かもしれませんが、施設が全体的に、「自分の中」に入っていってしまったな、という感じがあります。閉鎖的と言ってもいいかもしれません。今、この5月8日（※注）以降になっても、施設でのボランティアの受入れは、ほぼないと言ってもいい状態で、検討すらしていないところもあります。コロナが残した爪痕は、本当に大きいと実感しています。

また、先ほど小山さんがおっしゃっていましたが、元気だった方が、この3年間で介護認定を受ける状況になったことを私も実感しています。かなり多く、これは本当にびっくりしていま

す。清野さんがおっしゃっていましたが、町内会、老人会、その他の活動も、相当なくなっています。活動がなくなった後どうしているのかというと、閉じこもっている・ひきこもっている状況があると思います。私も包括の職員ですが、今、私たちがなかなかそういう方にたどり着けないというジレンマ、もどかしさをすごく感じています。

ここに来て、その状況を何とか打破するために、これまで東大和市では包括があまりイベントをやらなかったのですが、今年度からどんどんイベントをやって、包括の知名度を上げ、それから、相談してもいいのだという理解を広げていければ、と話をしているところです。本当に、このコロナ禍ではいろいろな大きな影響があったというのが実感です。



長谷川 栄司さん

（※注）令和5年5月8日に、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが、2類相当から5類へと見直された。

沼尾 私は保育士から始まり、高齢で養護、介護予防。そして救護と関わっていますが、3つの世界ともこの3年間で本当に大きく変わっていると感じます。

子どもたちの3年間というと、生まれてから3歳までというすごく貴重な期間です。その中で、マスクなしに家族以外の顔を見たことがないとか、笑顔を見ることができないという時間を過ごしています。その時期でしか感じ取ることができないものを習得できない、という問題が起こっています。高齢の方との触れ合いもできない状況でした。おじいちゃんやおばあちゃんに対し、これまで小さいころから普通に触れ合いが始まっていたのに、コロナが落ち着いてきて初めて触れ合うという子がいて、「臭い」とか「汚い」とか、今までだったら聞かれなかったような言葉が聞かれることもあります。いろいろな面で子どもたちの成長に弊害が出てくれば、これからの社会にも大きな弊害が起こってくるのではないか、すごく怖いなと思っています。

ご高齢の方は顕著に「分かれて」います。私の所属する介護予防推進センターに、毎日何があろうといらっしゃる方と、「一切来ません」という方に分かれました。

その「来ません」と言った方たちは、本当に心配になるぐらい、センターに来ません。家からも出なくなった

とか、歩くことができなくなったとかで、包括につながった方もいます。また、今ようやく来始めた方も、認知症が進んでいたり、いろいろな力が、かなり落ちていたりする状況があります。高齢の方にとってもこの3年というのはすごく大きかったなと思います。本当にいろいろな人たちの普通の生活を奪うものであったと感じています。



沼尾 治巳さん

沼尾 今、国では外国旅行を推奨したりしていますが、市の施設長会等で話をきくと、入所施設の方は「まだフルオープンにはしません」と言っています。いくらコロナが5類になり、定義上の濃厚接触者がいなくなっても、施設の中にひとたびウイルスが入ったら、これまでのように蔓延してしまい、利用者が亡くなってしまいかもかもしれないと心配しています。

法人内の施設でも、サービスを利用する人たちが本当に望んでいる生活は何か、それと施設として守るべきものがイコールなのかという話をしていま

す。もしかしたら二度と家族に会えずに死んでしまう可能性もあります。いよいよ最期の時には、何とか家族の顔が見られるように、面会できるようにしていますが、葛藤しています。

障害者施設でも、家庭に一時帰宅させられないなど、様々な状況などがあります。でも、職員は毎日自宅から通っている。職員はよくて家族はダメなのか、などいろいろな矛盾が蔓延しています。そういう矛盾に、「弱者」と言われる方たち、自分で自分のやりたいことを選べない方たちが巻き込まれているということに、とても胸が痛くなります。利用者様はどうしたいと思っているのか、外に出たいと思っているのか、家族に会いたいと言っているのか、それを私たちが決めてしまっているのかと、常に私たちの中でも葛藤があります。

ただ、高齢者施設では、コロナに罹ってしまえば命を失うかもしれないという大きなリスクの中なので、少なくともすぐに以前のような状態にはならないと思っています。怖がる気持ちはもちろんわかります。高齢分野でも、入所施設と、在宅を支える包括や通所などとの違いは大きいと思いますが。

絶対に戻せない時間をどうやって埋めていくのか、またコロナに対する怖さがどこかでどう解消していくのか。一人一人の考え方はそれぞれです。国が外出や旅行を推奨する中で、「今後はご本人の気持ちに任せます」と言わ

れると、判断がすごく難しいところもあると思っています。

今 ありがとうございます。本当にその辺の葛藤は大きいです。特に高齢者施設などで働く人間としても矛盾や葛藤があります。「自己決定」という言葉は非常に重さがあると思います

コロナ禍での新たな発見や取り組みも

相澤 僕の「つなひろ」のワーキングチームに参加したきっかけは、当時の上司の代理で参加したところからです。参加してみたらすごく楽しく、ここで地域のいろいろなことを知ることが出来ました。その時はまさか自分が地域づくりを専門にする仕事を担当するとは思っていませんでしたが、ここで得た情報や知識がすごく生かされる場に異動できたと思ったら、世の中がコロナになってしまいました。

うちの施設（介護予防センター）も最初は3か月間、センターを閉めました。特養等の入所施設が、地域とのつながりがなくなることは皆さん感じたところだと思いますが、それどころか「地域の全てが止まった」というのが僕の実感でした。その間に、「コロナフレイル」とよく言われていますが、地域の方の体調や健康がどんどん悪化して、「このままではまずいな」というのを感じました。たぶん、地域の元気な高齢者の皆さん自身が一番感じていたのでは、という最初の3か月でし

た。コロナという脅威がありながらも、本当に地域の方の行く場所がなくなっていたので、「このままだとコロナにならなくても皆が死んでいってしまうのでは」と感じていました。

自治体の考え方にもよりますが、豊島区では理解を得て、コロナ禍でもなるべくセンターを開け、活動を徐々に再開してきました。現在はコロナ前の来館者数の約 1.5~1.6 倍、月間で延べ 1,600 人が利用しています。その中で「この人は閉じこもりがちだから」と、地域の人新しい人をどんどん連れてくるんですね。そういう意味で「地域の力」は失われていないと感じられますし、地域に居場所というものは求められているのだと引き続き思っています。



相澤 和彦さん

ただ、すごく二極化は進んでいます。私たちのような施設や場所がある地域と、ない地域とでは全然違うと思います。自治体ごとの考え方の違いもあると思います。沼尾さんの言う通り、施設があったとしても、行くか行

かないかの選択があります。どちらかというに行かない選択をする方が多いです。閉じこもっている方たちにどういうアプローチをするか、試行錯誤して、いろいろな取り組みをしているというのが今の状況です。

一方、コロナでネガティブなことばかり言っているかもしれない気もしています。この状況のおかげで、オンラインでの講座なども自分たちでできるようになりました。拠点同士をオンラインでつなぎ、違う場所の参加者と体操を一緒にやってみるなど、新しい取り組みも始められました。体操の先生が外出できない状況でも自宅からオンライン参加したとか、僕も濃厚接触者になりましたが、自宅から司会としてオンラインで参加することもできました。なので、そういう意味で新しい取り組みというのものも、やれる方法を探せば何かしらあるのだと感じられた 3 年間でした。

今 ありがとうございます。相澤さんや沼尾さんの言う「二極化」というのは、僕もすごく感じています。例えば一般的なことで言うと「マスクをする派なのか・しない派なのか」「ワクチンを打つのか・打たないのか」もあるでしょう。施設の対応では、「積極的に何かできることがないかと探す」か、言い方は悪いですが「コロナを理由にして一切止めてしまう」のかがあります。

おまけにコロナ禍では、対立する意

見を認めないような風潮が至るところにあります。不寛容な世の中になったというか、自分の主張はするけれども相手の考え方をなかなか受け入れてくれなくなったような世の中です。その風潮に、精神的なしんどさをすごく感じたところがあります。そのことは、個人の動きも組織の動きでも、いろいろなところで見られたと思います。

コロナの感染法上の位置づけが5類に変わり、今後を考えていく上でも、そうしたことはなかなか払拭できないのかなと思います。ただ、考え次第でもあります。相澤さんがおっしゃったように、「コロナ禍だったからこそ新たな取り組みができた」こともあり、そうしたことをどう見つけていくかが、これからの課題かなと思います。

ボランティアや民生児童委員の方々の状況

今 このワーキングの特徴として、高齢協の会員施設の方々だけでなく、東京都社会福祉協議会の、東京都民生児童委員連合会の事務局と、東京ボランティア・市民活動センターからも委員にご参画いただいています。様々な視点から地域との取り組みについて情報収集や発信を行い、具体的な取り組みにつなげていこうとしています。まず東京ボランティア・市民活動センターの榎本さんから、現在の思いや把握して

いる状況など、お話しいただければと思います。



榎本 朝美さん

榎本 私はこの「つなひろ」のワーキングのメンバーに5年前に入りました。コロナがなかった5年前は、ここでいろいろなつながりができました。現場の皆さんの声を聞くことができたので、それをボランティアセンターに持ち帰らせていただいて、今こんな話があるのだと伝え、いろいろな事業に活かすことができたと思います。ここでいろいろなことを教えてもらって本当に良かったと思っています。皆さんの現場も訪問させていただき、和気あいあいとした雰囲気为本場にすてきなチームだと思っています。

コロナ禍で状況は一変してしまったところはあるかとは思いますが、ですが、ボランティアセンターの中から見ていると、もちろん、直接会うことができないという、とても大きな痛手はあったとは思いますが、家など離れた場所からできるボランティア活動「リモート・ボランティア」という形を受

け入れてくださる施設の新しい動きがありました。例えば敬老の日に向けてお祝いのうちわやフォトフレームのデコレーションしたものを作って施設に送っていただいたり、お祝いメッセージを届けていただいたり、あとは、暑中見舞いのはがきを送ってくれたボランティアさんもたくさんいます。特に暑中見舞いのはがきの活動については、最近、お子さんはお手紙を書く機会はかなり減っていると思いますが、この活動を通じて「手紙の書き方が分かった」という声があるなど、新しい経験につながったのかな、と思う部分もありました。また、高校に入ったばかりの子が高齢者施設の皆さんにオンラインでマジックショーを披露してくれたりもしました。いろいろな形で機会を創出できていると思います。

元々、施設に行きに行くボランティアというのは多少ハードルが高いのですね。どんなところかわからないところに直接行くのは少しハードルが高いのですが、私は、コロナ禍で取り組んだ、家からできるボランティア活動という形で少しずつ施設のことを知ってもらうことで、施設を応援してくれる人が増えるのではないかと感じたところです。

まだまだ現場にいる皆さんにとっては、リスクが高い高齢の方々と接しているところで油断はできないかと思いますが、ぜひ一緒にボラセンと協力し

ながら地域に開くという新しい形をつくっていけるといいと思います。

今 続いて、東京都民生児童委員連合会事務局の藤野さんからはいかがでしょうか。

藤野 私は今年度から東社協の職員になり、現在入職して1か月です。私が東北地方の県で、前職である介護職に入職した時がちょうどコロナの始まった時期でした。コロナ禍で、地域とのつながりを一切ストップすることを選択した施設であったため、働いていて、地域とつながっているという実感が全くない状況が続きました。他県でも東京でもどこでもそういう状況だったということは、今日お話を聞いて、とても感じました。

民生委員の方々の話を聞くと、コロナ禍で民児協（民生委員児童委員協議会）の活動を中止したところが多くあります。特に食事系の活動、子ども食堂等は中止したところが多くあったようです。ほか、コロナが特に流行っていた時期には、戸別訪問でも直接会えず「気にかけていますよ」という手紙を置いていたという話もありました。

民生委員さんが地域となかなかつながれないという状況だけでなく、委員さん同士のつながりも希薄になってしまったとも聞きました。委員さん同士での会合や懇親会も中止になり、委員同士、顔を合わせた交流が全くできない状況でした。また、「やるぞ」という気持ちで新たに民生委員さんに就任してくださったのに、なかなか思うように活動ができな

かったことで、1期で退任されてしまう
民生委員さんが結構いたようです。



藤野 真琴さん

藤野 3年ぶりにコロナが下火になってきたため、各地域で、民生委員さんや関係機関が集まる協議会や研修を、久しぶりに対面で行った地域が多くありました。顔を見て情報交換ができるのはすごく有意義だ、民生委員としての活動の意識が高まった、というふうにおっしゃっている方が多くいました。顔を見て情報交換するというのは、つながりをつくるということだけではなく、ご本人の民生委員としての意識づけとしても大事なところではと感じました。

あとは、コロナ禍だから新しくできた取り組みもあったようです。今までは会議をする際も、仕事があるなど、決まった時間になかなか参加できない民生委員さんが多くいました。でも集合開催に代わってLINEのトーク機能を使った意見交換で、自分の時間に合わせて把握することができたり、オンライン開催にすることで参加しやすくなったという意見もありました。それはコロナ禍の中で新し

い状況というか、コロナだったからこそ参加しやすい状況になったところだったと思います。

今 今のお話については、民生委員さんだけでなくまさに高齢者施設や地域の取り組みの中でも同じことが起きていると思っています。コロナ禍でも、少しずつ活動が再開できるようになっても実感していることがあります。それは「直接会っている」ことの大事さ・重要さです。おそらくそれまではあまり実感していなかったかもしれませんが、それが途絶えてしまったことによって、再認識されたことがあったと思います。

一方、オンライン開催等、利便性が増したことは、「こういうやり方もあるのだ」という発見もありました。しかしオンラインの限界もあります。直接会うことのメリット、オンラインのメリット、それぞれを理解、実感できたというのは、ある意味コロナ禍の中では重要なポイントなのかなと思います。

地域に向けた取り組みの中でも同じことが言え、先ほど榎本さんからもあったように、ボランティア活動も、直接施設に行くのは確かにハードルが高いかもしれません。時間的制約もそうですし、構造としても結構重たいものとか大変なものもあるかもしれません。しかしコロナ禍でそれがオンラインや手紙のような形でやれたことで、間口を広げる効果やハードルを下げる効果があったのも、間違いなく1つのメリットでもありました。でも、それだけでは十分に満たされない

ものがあるとしたら、そこをどうしていくかというのが、これからの私たちの取り組みの中でも課題になるのではと思ったところです。

コロナ禍の経験もふまえ、前に進む

今 これまでのお話に上がっていた、オンラインとの併用の取り組みや直接会うことのメリットを感じたことなど、コロナで経験したことがあります。この経験をふまえて、これからどうしていきたいか、皆様からご意見をいただければと思います。令和4年度に実施した、地域とつながる取り組み状況のアンケート調査でも、いろいろなご意見をいただき、取り組みのレポートもお寄せいただいています。アンケート調査の実施を通じて、また、それぞれの職場の中での取り組みや個人的なお考えも含めて、「こんなところが必要」ということやポイント、「こんなことができたらいいな」と思っていることなどをぜひお話下さい。

清野 いろいろなことを再開しなければ、ということで、うちでは、コロナ前にずっとやっていた市民向けの講座を去年の秋口から再開しました。「二極化」の中の「積極的な人たち」の意欲がすごいです。以前はそれほどでもなかったのに、再開後はとてもたくさんの「受けたい」という人がいます。先ほどの相澤さんの話のように、新年度に入って次の講座を始めたら、その人

たちが友達を連れてくるという感じで、50人定員のところに毎回100人以上の申込みが来ます。特養の地域交流スペース全部、もともとコロナの対策用の物品置場にしていたようなスペースも全部取り払って、そこに人を入れて講座をやらなければいけない状況です。やはりみんなすごく我慢していたのだなというのを実感して、これは人数制限はやめようと、何が何でも100人を入れようと考えています。今は5類になりましたから、人数制限せず、机に3人掛けでもいいか、という状況です。今月からまた始めます。

それから、うちの包括も民生委員さんとの情報交換を再開しました。コロナ禍の中で新しく民生委員になった人たちで、お年寄りのお宅に行ったことがないという人がいます。自分のエリアにどんなお年寄りがいるのか全然知らないと言います。コロナ前までは、年2回ほど、地域包括と民生委員さんで個別のケースの話などをして、コミットして支援していました。でも、一度もお宅に行ったことのないお年寄りの話はやはり民生委員さんも知らない。また、認知症の人に会ったことがない、という民生委員さんがいたりします。それで、その人たちにいま一度、「年を取ることはこういうことで、認知症になっていると、こんなふうになります」という話をしながら、情報交換をやり始めたところです。



清野 私の法人は子育て支援の事業も持っています。コロナ以前は、8050問題に取り組むため、府中市内の高齢と子育て、あと自法人にはありませんが他法人の障害系や就労支援、生活困窮の相談員さんたち、それから、その各部門の行政の担当者の人たちを集めて「家族支援情報交換会」をやっていました。

コロナでその開催をピタッと止めていましたが、何が何でもやらなくてはということで、まず去年の11月に1回やりました。そのときに、エリアの民生委員さん30人ぐらいと、様々な分野の相談員さんもすべて集めて、70人ぐらいで事例検討をやりました。民生委員さんからも、またやってほしいという要望があったので、今年度、年2回やる計画を立てました。行政は、自分たちは縦割りだとよく知っていて「あなたたちがこういうことをやってくると助かる」と言います。市役所の中では出会わないのに、この場に来て、役所の多分野の担当の人たちが一緒になって話すような場です（笑）。この取り組みを今年度また再開すると

ころです。民生委員の方たちも、お年寄りのことや自分のエリア内にいる人のことが分からなくなってしまっているのをどうしたらいいのかなと、考えているところです。

今 そういう状況はあちこちでありますね。たぶんあきる野市でも同じです。民生委員さんだけでなく、うちの地域には「ふれあい福祉委員」という方たちがいます。私も実は委員をやっているのですが、「コロナ禍で訪問を中止してください」という時期がありました。その時期がちょうど任期が替わったところでした。そのまま2年たってしまって、入れ替わりの中でどんどんベテランがいなくなってしまうと、訪問のノウハウがどんどん薄まってしまいました。新任の方が訪問の仕方がわからないのです。先ほど、民生委員さんが1期で辞められてしまう、という話もありましたが、本当に「一からもう一度組み立て直し」という形です。そこからスタートしなければいけないのはかなり重くもありますが、取り組んでいくことは大事です。

相澤 コロナで一度いろいろなことが中断されたことが、逆に、本当に目的に立ち返る良い機会なのではないかというのを前々からずっと思っています。僕も油断するとそうになってしまうのですが、どうしても、手段にこだわるといっつか、「今までこういう形でやっていた。コロナ禍になり、同じような形でやれないから中止」というような流れ

が多いのではないかと思います。そういう時、「そもそも何のためにそれをやっていたのか」を考えて、全く同じ手段でなくても、少し違う手段を使って、同じようなニーズが満たせていければ、それはそれでいいのではないかと考えています。



相澤 去年の5月から始めた取り組みに「だれでも食堂」があります。大人食堂でもなく子ども食堂でもなく、障害があっても、どんな方でも誰でも来られる場所を目指すという食堂です。これを企画したのはコロナ禍の少し前です。始めようと思ったけれども、コロナの感染予防のためにできないという形になって、1、2年間そのままになっていました。

ただ、よくよく考えたら、僕の場合、閉じこもりがちな人や地域に出るのが苦手な人に、どうしても来てほしかったんだということを思い出したんです。わいわい会食しているところには、逆にそういう人たちはもっと行きたくないよね、と気づきました。コロナが「ちょうどいい理由」になって、

某ラーメン屋さんみたいな感じで、一人ずつ外を向いて食べて、一人ずつ消毒して、別の部屋に歓談コーナーをつくりました。皆さんには「コロナのせいですよ」という言い方をしましたが、そこに来るのがやっとで、人と一緒にはご飯を食べたくない人でも来やすい環境をつくれたというのは、一つ良かったかな、と思っています。

コロナが5類になった今も、変えずにずっとそのままのスタイルでやっています。歓談コーナーでお茶を無料を出しながら、しゃべりたい人はそちらでしゃべって、ご飯を食べて帰るだけの人は帰っていいよ、という形を取っています。そうしていたら、40代の閉じこもりがちの方も、最初は社会福祉協議会のコミュニティーソーシャルワーカーさんの紹介、という形で来ていたのが、今では自分で電話で予約をして、来て、「おいしかったです」と言って帰っていくようになってくれています。たまにお茶も飲んで帰ったりするので、今後、そういう方をボランティア側として受け入れて一緒にやっていけるようになったらいいなと思っています。

今 「会食」というと「みんなでわいわいしなければいけない」とどこかで思っている視点をどう変えるか。それこそ本来の目的に立ち返る、と。ある意味、コロナをうまく理由として利用してしまうというのは面白い。というかすごいなと思います。放っておいて

も、来る人は場さえあれば来てくれる。一人で食べるなんて、僕なんかは固定観念でダメだと思うけれども、逆にみんなのところに入りづらい人、場があっても来ない人こそ本当は地域のニーズなわけですね。

相澤 実際にアンケートを取ると「みんなと食事ができて幸せ」という回答がすごく多いです。一人一人で食べていても、そういう感覚を、誰かと同じ空間で食事をしているというだけで得られる、というのは本当にこちらの学びにもなりました。

今 とても大事なポイントです。本来の目的は何か、その人たちの側から見たら、それでもありで十分だと。むしろ僕らがやろうと思っていることは、逆にその人たちにとってハードルが高い話かもしれないというのは、1つの気づきですね。

清野 本当にたどり着かなければいけない人にも、それでたどり着けたということですね。

相澤 そうですね。ほかの事例でいうと、知的障害のお子さんを育てているひとり親家庭の親子の2組に、同じ時間に来てもらうことで、相談しあう関係ができたり。そういう、個別を大事にする場だからこそ、できることもあるかなということを感じています。

「枠からはみ出したところ」にこそ、取り組むべきニーズがある

沼尾 今のお話、羨ましいです。清野さんのところは包括、うちは介護予防推進センターで、同じ府中市内の同じセンター長会議に出ているのですが、それぞれ全然立ち位置が違います。

介護予防センターは健康な方が主で、民生児童委員さんたちと介するところが全然ない。本当はうちも許されれば、同じ建物内に保育園もあるので、高齢者が給食を一緒に食べたい。一緒に食べればオンラインで雰囲気を見ながら食べるだけでもいい。一人で食べたとしてもきちんと栄養価が整っている食事を食べていただくところから始めたいと思うのですが、なかなかそういう機会を作ることができません。また、例えば、包括と民生児童委員さんとが話をする中で「この人は介護も必要なく、デイサービスを使うような状態ではなく、居場所がないだけだ」というようなことがあれば、介護予防センターにつないでくれたりするといいなと。そういう話ができていた時期もあったのに、他分野の施設に2年間行って、戻ってきたらコロナで、その間にうちの市内での立ち位置は、包括とは全く別の位置づけになってしまっていました。行政には、せっかくの資源を柔軟に、最大限活用していただけるように働きかけたいと思っています。

清野 行政の人も、マニュアル内の仕事がコロナの3年間で煮詰まってしまっているんだと思います。やらなければいけないことがその中にしかなく、はみ出すことがあったときに対応できなくなっている部分はあると思います。

沼尾 もう少し柔軟になってくれるといい。特養だったら特養、ほかの種別だったらその種別ごとに、みんなそれぞれの同じ悩みを相談し合っていると思います。でもこの「つながれひろがれ」のワーキングでは、つながったり広がったり、いろんな人たちみんな、何かやってみようというところだと思っています。これはすごく大切なことだと思っています。

小山 私が勤務する複合施設は、品川区から指定管理として受託しています。区からは、プラスアルファ的な取り組みにはすごく背中を押してもらっているような、応援してもらっているような感覚で、行政はすごく力強い存在です。特養で施設長をやっている、いつも後ろで行政が支えてくれているという気持ちがあります。

清野 それはとても幸せなところで働いていますね。

沼尾 地域によって、行政の考え方等によって、線引きがされて柔軟に対応できなくなることは残念なことです。

清野 先ほどの相澤さんの話のように、やはりどれだけ頭が軟らかくなれるかが、つながるため・広がるための一番

の「ミソ」だと思います。だから、例えば委託の形や考えによってできないと言われることはあるけれど、人と人がつながることまで監視できないでしょう。

沼尾 そうですね。私もその逃げ道はもっていますが、固まっていくとつまらないし、本当のところにとどり着かないのですね。なかなか厳しい状況にあります。

相澤 うちの「だれでも食堂」も区の高齢者福祉課の委託事業の一部です。なので、行政からは「だれでも」でなく、「大人食堂」でやってください、とずっと言われていて、いろいろ話しながら、まあ進んできたところです。実績が出てきたら、行政も広げる方向になってきています。

今 皆さんのお話のように、行政に限らず、またコロナだけが理由ではなく、お互いが理解しあうことの難しさはあります。これまでにないことや取り組みをやっていくときのハードルに、縦割り意識のようなもの、またそれぞれの役割を限定してしまうようなことがあります。「つながる」とか対象範囲を広げていくことに対する抵抗感のようなものは確実にあります。

高齢者施設などを例に取れば、人材不足に加え、コロナ禍では、感染対策などで職員の業務量が増大していたり、負荷がかかっていたりするところです。プラスアルファをやることはど

れだけ大変か考えたら、無理だという話が出たりしたと思います。また世間でも、コロナ禍の中では「生活を必要最低限のことに絞り込みましょう」

「無駄なことは排除しましょう」というような風潮があったりしました。仕事の棚卸しをする中で、おそらく、対象者を広げていくとか、他機関につなげたりつながったりすることというのは、「余計な手間」で、行政的に言えば「要綱上から外れる業務になってしまいます」と。

でも、実際には地域の福祉ニーズにどう応えていくかを考えると、制度の枠に収まらないからこそニーズとなっているんだと。先ほど清野さんがおっしゃった、「こぼれ落ちる」というのは、枠にはまらないから落ちてくるわけです。そこをどうするかというときに、いわゆる既成概念や最低限こなさなければいけないことはもちろんですが、どう少しずつ幅を広げていくかということが、とても求められます。行政に限らず、僕ら福祉施設・事業所の方でも、枠を広げたりつながったりすることを「余計なもの」と思うところがどこかであるのではないかと。それは、既成概念というところで共通してくる話かと思います。

沼尾 頭の軟らかい人もいれば、それを厄介だと思ふ人も必ずいると思います。「また何か言っている」と言われるようなこともありますよね。

清野 それに負けては駄目です。とにかく平気でやり続けることが道になりますから。

沼尾 私も平気でやり続けています。いずれそれが当たり前になれば、道になりますよね。

清野 そうです。今起きてきたいろいろな新しいアイデアは、最初はそうやってパージされていたものが、いつの間にか王道になっていくということがほとんどなのです。相澤さんの話のように、いつの間にか「やってくれてありがとうございます」と言われるようになりますよ。



活動再開や改めて取り組みを始めることへの理解を得るために

今 コロナ禍になる前、例えば「つなひろ」の説明会や報告会などで担当者の情報交換をするときでも、「職員や上司の理解が得にくい」とか「協力が得にくい」というのがありました。これはたぶん根っことしては同じことです。小さな積み重ねだとしても、成果

を実感すること、必要性を実感することの二つがポイントになると思います。

今年、一番厄介なのは、コロナ禍で、かなり下火になっていたり、または、止めていた活動を再開させようとする。その時に、ただでさえ忙しいのに、という声があるでしょう。また、そもそも必要なのか、というところから話を始めなければいけないところもあるかもしれない。これを僕はすごく不安に思っています。「怠惰」というと少し過激過ぎですが、この3年間で一番怖いのはそこかなと思っています。その辺りをうまく乗り越えるヒントはないでしょうか。

沼尾 地域の方々も外とのつながり自体が増えていますよね。それと「つながったときの幸福感」は皆さんこれまで以上に感じていると思います。

多くの地域が高齢化しているので、「自助・共助」や「協働」ということをすごく謳っていますね。「地域包括ケア」と言っているのだから、お年寄り、お年寄りだけではなく、自分の身近にいるいろいろな人たち全て、子どもたちともつながることに取り組みたいです。

例えばうちのセンターでいえば、介護予防が役割といっても、65歳以上の人だけに行うのが介護予防ではないと思っています。子どものときから健康に興味・関心を持っていただければ、自分の体をコントロールして健康寿命

が延びる。だから物は言いようで、

「未来の健康寿命を延ばしている」と言って子どもも対象にしてしまえばいいのではないかと考えています。たとえば行政に「65歳以上の人だけにしか補助金を使ってはいけない」と言われても、お金を使わないでタダで宣伝する分にはいいでしょう。いかにそういう逃げ道を探していくかですよね。

今 理由をどう構築して相手を口説くというか。難しいけれども面白いところでもあります。

沼尾 清野さんは強行突破してきた感じですよ。

長谷川 それにはかなりの熱量が必要ですよね。コロナで、その熱量を奪われている人がけっこう多いです。ですので、周りを見ても、どうしても熱量を奪われた方がどんどん脱落していく、落ちていくという感じが見えてきてしまいます。だから、今の話を聞いていると非常に羨ましく思いますし、そんな熱量をもった方たちには、ぜひうちにも来てくれないかと思えます。



沼尾 キーパーソンは、笑っていることが大事ですよ。

相澤 気持ちが下火になっている人たちに対して、何かできること。たぶん僕ら、「つなひろ」のワーキングチームのメンバーのように、能天気なくらい楽しんでいるのが大切なのではないかと思っています。結局、物事を見るときに、人は間にいる人の表情でその後ろのものを見ます。だから、こういう地域活動をしてとても楽しんでいるからこんな元気な人たちなのだということが伝われば、何か少しでも後押しできるのではないかと思います。

沼尾 新しく「この人と知り合いになった」と言って参加者を連れていくと、職員から「またですか」と言われるくらい、みんな諦めてきています。

今 実際、自分の職場を見て、同業だけでなく異業種とか、プライベートなどでもほかの方とのつながりを持って、様々な人と活動を共にしていたり刺激を受けたりしている人は、仕事に対する熱量や、考え方も柔軟であると感じています。

コロナ禍での高齢者施設や事業所はどうしても孤立しているというか、そこに固まって、隣の施設が何をやっているかすら、分からなくなっています。せめて施設同士、お互いに悩み事が同じ、ということが出発点でもいいでしょう。また相手は町内会でも自治

会でもいいし、保育園・幼稚園、障害者施設、もしかしたら営利企業でもいいかもしれない。いろいろなところと付き合い、活動を一緒にする中で、「こんなこともできる」というところに持っていける人がいると、それで元気が出てくるような気がします。

沼尾 これまで、ワクワクの素となるような取り組みができたと思いますし、本当に笑顔で話していると思います。そういう人たちばかりいますから。

今 少し話は変わりますが、藤野さんは、これまで地方で働かれていて、東京に来られたというお話でしたね。以前とは職場も仕事の内容も大きく変わっている、ということもあるでしょうが、例えば職場の違いや地域の違いはいかがですか。それが今後、コロナの制約が少しずつ薄れていく中で、ご自身が地域の中で生活していく、また、職場の中で仕事をしていくというところで、実感していることや持たれたイメージなどはありますか。

藤野 まだ引っ越して1、2か月ぐらいしかたっていないので、本当にまだ東京に慣れるところに一生懸命です。ただ以前は、田舎ということもあってか、すれ違うときに挨拶をすると返してくれるのが普通でしたが、東京では、この間、散歩しているお父さんにすれ違ったときに挨拶したら完全に無視されてしまいました。また、別の話で、自分が住んでいることを知られたくない

から、自宅のマンションに入るときに、同じマンションに入る人がいたら一周回ってから入るようにしているという話も聞きました。皆さんがそうかわかりませんが、そういうものなのかな、と思いました。

清野 僕は藤野さんと同郷で、半年間、コロナ患者がゼロだったことで、僕は帰りたくてもおふくろのところには帰れませんでした。あの時は本当に、コロナというのは人を映す鏡だなと思いました。最初に陽性だとわかった人は、いられなくて引っ越したと聞きました。東京でもそういうことがいっぱい起きましたが、今の話に関係して言うと、自分が住んでいる町が好き、という人が増えない限り、その町は良くなりません。だから、自分が住むマンションを一周して入るような人は本当はそのマンションにいななくてもいい。

タワマン（タワーマンション）で、自分で自治会をつくって民生委員になった台東区の人を知っています。その人は、今まで1回も会ったことのない人たちがマンション内に何百人も住んでいることに気づきます。たまたまそのマンションに住んだだけなのですが、新たに関係性をきちんと作りたいた。「災害の時にはタワマンの人は町場に出てくるな、自分のところで何とかしろ」と言われているので、フロアごとに町会をつくって防災訓練を始めています。

この例は、たまたまそういう熱量が

ある人の話ではありますが、とにかく、自分たちが担当しているエリアの人たちが自分のことを好きになって、地域を好きになるような取り組みを考えていかないとダメではないかと思えます。田舎と東京という差ではなくて、やはりどこに住んでいる人も、自分が住んでいる町が好きにならない限り、その場所は変わらないのではないかと考えています。

沼尾 今、友達ができないと言う人がたくさんいますが、友達の定義はいろいろだと思います。私は大体知り合った人とすぐに仲良くなって、その後は結構長く続くのですが、でも、それはこちらが心を開かない限りは絶対にあり得ないでしょう。友達をつくりたいというのではなくて、自分の周りにいる人たちに関心を持ったり、その人たちが苦しまないでいてほしいと思う気持ちがすごく大事です。

高齢者施設・事業所の職員として考えると、例えば入所施設の場合、家族がいなかったり、いても毎日では会えず、病気や状態も重かったりで、利用者の方には日常的に頼る人は職員しかいない状況があります。コロナ禍では特にそうです。

その職員たちが、利用者に関心がなかったり、ただ生きていればいいと思ってしまうたら、こんな怖いことはないです。本当に、それだけは職員に言っています。病気にならないことも大事だし、確かに生きていれば責められ

ないかもしれませんが、ただ毎日を生きていけばいいと私たちが思ってしまったりいけない。病気にならないこととその人が幸せに生きていることとイコールなのかと、疑問に感じなくなってしまうたら、最悪、閉じ込める事だててできてしまう立場なのだから。本来の意味で利用者様に関心を持つことが大事です。

だから、日頃から、すれ違った人が挨拶してくれなくても、自分はするだけする、という気持ちが大切ですよ
ね。

相澤　そこで何回も挨拶ができるかどうか
が求められるような気がします。

今　例えば田舎と都会とか、地方と東京
などということだけではなくて、それ
ぞれの地域の特性のようなものは確実に
あって、それぞれのやり方として正
解はないのだらうと思います。ただ、
今回のコロナ禍を経験して、つながり
の必要性は間違いなく実感された方が
多いだらうと思います。それがおそら
く大多数で、ある程度コンセンサスが
得られるかもしれない。その中で、先
ほどの話のように「こぼれ落ちる人」
がないようにというときに、地域の
特性をどう把握しておくか、そこに合
わせた活動をしていくのがとても大事
な視点だと思っています。

例えばマンションを一周回って入
る、という話は、物騒な世の中ではあ
るので私は防犯上、理解できなくもな
いです。それにも地域性があり、そこ

に住まわれている中にそういうお考え
の方々がいることも、その地域の状況
だと考えに含めて行動していく、と。
そうすると、先ほどの相澤さんの取り
組みのように、こちらの思い込みも取
り払って変えていくことができると思
います。そういうところがとても大事
かなと思っています。



コロナ禍を経て、「つなひろ」キャンペーンの 再開を前に、今後の夢や取り組みたいこと

今　ここまで、皆さんからいろいろなお
話をいただき、特に後段では今後の取
組みへのヒントをいただきました。

「つなひろ」の皆さんとお話ししてい
ると、自分としても元気をもらって帰
れるような気がしています。

今年度、「つなひろ」としては4年
ぶりにキャンペーンを再開しようと考
えています。ぜひ高齢協の会員施設・
事業所の方々の多くにご参画もいただ
きたいと思っています。やはりコロナ
でできなかったことができるようにな
ってきたこともあるでしょうし、逆に
コロナ禍での新しい手法や視点なども

あります。それを今後、どう組み合わせ
て新しいものをつくり出していく
か、相乗効果をもたらしていくかとい
うことは、これからの取り組みの勝負
どころかなと思っています。

ぜひ「つなひろ」のキャンペーンに
多くの施設・事業所に参画していただ
きたいと思っていますが、そのためにも、
今後の夢や、こんなことをやりたい
ということはありませんか。

長谷川 私は今、皆さんのお話を聞いてい
て、このワーキングチームの私たちの
笑顔や元気が、見学会に行った施設で
もいいアピールになるのではないかと
思いました。取り組みをすることに、
たぶん全員が賛成してやっているところ
ばかりではないと思います。先ほどの
話に出た、「わかってくれない上司」や
「協力してくれない同僚」という方々
に、これはすごくいい取り組みなん
ですよ、というアピールになるのでは
ないでしょうか。

良い方向に目を向け、多くのところに
アピールすると、さらに「自分たち
も結構取り組んでいけるのではない
か」となってくるのではないでしょ
うか。そのためにも私はキャンペーン
には見学会は外せないと思っています。
前向きに検討、という以上に、ぜひ
実現に向けていきたいと思っています。

今 それは本当に実現したいですね。

清野 僕も一つあります。コロナは「つな
がれ ひろがれ」の逆だったでしょ

う。「つながらない 広がらない」で
したので、今度のキャンペーンの頭に
「いま一度」とか何かそういうものを
つけて、キャンペーンをやりたいなと
思います。本当に、「人とつながらな
いでください」と言われましたよね。

今 リスタートみたいな感じですね。コ
ロナ禍は、本当にソーシャル・ディス
タンス、距離を取る、でした。

沼尾 そばに寄るな、でしたよね。

榎本 コロナ禍で入職された方や、コロナ
禍に高齢者施設に異動された方も多く
いると思います。「つなひろ」キャン
ペーンで地域とつながっていた時のこ
とを知らなかったり、取り組みのイメ
ージが湧かなかったりするかもしれま
せん。もしかしたら、なぜ地域の人と
つながらなければいけないのか、どう
したらいいだろうとお困りの職員の方
もいるのでは、と思っています。

高齢者施設に入って介護技術を高め
ていこうと思っていたら、「地域とつ
ながって」と言われて、「えっ」と思
っている人ももしかしたらいらっしゃる
かもしれませんね。「つなひろ」の
メンバーはすごくアイデアがあふれて
いて、楽しい人たちが多く、これ
を機に、キャンペーンに参加してみ
るところから、地域とつながる方法を
一緒に考えていけるといいと思います。
今まで取り組んでいないとか、前
に取り組んでいた人が異動して私
はどうしたらいいのだろうと困
っている人も、

ぜひ怖がらずに来てもらえるといいのではないかと思います。

今　そこがポイントですよ。次の担い手とはなったけれど、取り組み方が分からない人はこの3年間にいっぱいいると思います。



相澤　今、企画段階で、実際やる方向に向かって進めていることがあります。

地域は動いていきますが、私の所属先の施設周辺の地域の住民層も変わってきています。大きいマンションができて新しい住民層が入ってきています。その中で、新しい住民だけでなく、正直な話、元々いる住民層の方たちにも、包括があまり知られていない現状があります。また、何か困りごとがあったときに、どこへ相談に行けばいいのかを誰も知らない状況がある。各機関・団体も同じことを思っている、というのを僕が話まくっていたら、みんな徐々にその状況に気づいてくれました。

そこで、いわゆるフェスのような形で、各団体がブースを構えて、それぞれ10分ぐらいずつPRタイムをつく

ったりして、人が集まるイベントを作ろうとしています。7団体で6月頃に開催しようと思っています。その地区の民生児童委員協議会の会長さんから話を通してもらって、その場では民生児童委員さんが子ども向けの出し物をやってくれたり、地域のクリニックも来て「今と昔の処置の違い」を教えてくださいたりする、そんな楽しいイベントを作ろうと思っています。それを毎年定例開催できるような形に持っていきたいというのが今の野望です。

今　ありがとうございます。相澤さんのこのエネルギーがどこから湧いてくるのかを勉強したいですね。

お時間もそろそろですね。先ほども少し話したように、キャンペーンをこれからやっていこうとしています。ぜひ多くの会員事業所・施設の方にも参加していただきたいと思います。

また、担い手として、自ら買って出るということが必要だとも思っています。私ごとですが、私はあきる野市社会福祉協議会が委嘱する、ふれあい福祉委員の委員を務めています。だいたい各町内会・自治会50世帯に1人ぐらいずつの委嘱で、2年で1期です。私はいま5期目か6期目です。それから、町内会・自治会は加入率がどんどん下がっていますが、私は引越したときに町内会にすぐに入りたいと言って、入りました。

なぜそんなことをやっているか。普段は仕事で管理的な立場にいるから、

ほぼ朝から晩まで、下手すれば土日祝も家を空けています。夫婦二人暮らしですが、もし何かあったとき、自分が家にいて、近所で孤立したくないなと思ったところからです。仕事では、閉じこもり予防をやりましょう、とか、認知症にならないように、などと言っていて、自分がいざとなったら行き場がなくなったら嫌だと思っています。どこかで自分を覚えておいてもらわないと、という思いが元々のきっかけでいろいろお引き受けしてきました。

実はそれが一番のモチベーションになっています。それだけのためにやるわけでもなく、結局は、こういう取り組みをしていくことで、自分が何か困ったときに助けられたり、自分の施設で何かで困ったときに、ほかから助けられえたり、いずれ自分にも返ってくるのかなと思っています。

例えば町内会・自治会の加入率が低下しつつあったり、地域の活動への参加が、忙しいからというだけでなく、少しずつ減ってきていたりしているような現状があると思います。それはやはり、やりがいや意味が伝わっていないのと同時に、いずれは自分たちのため、人のためだけではないということが伝わっていないからでは、と思います。私はそうやって担い手になることが必要なと思っています。

今日ご欠席の方もふくめた、この「つなひろ」のメンバーは、本当にいろいろなアイデアを持っていたり、そ

れぞれの地域でいろいろな活動をされていたりして、話をすると元気をもらえます。実はワーキングもこのコロナの間はオンライン開催となっていて、皆さんには実に3年ぶりに今日、直接お会いしました。

オンラインとはやはり集まったときの空気感が違います。それから、会議の中だけではなくて、会議の前後、席を外したところでもいろいろな話ができてくるというのは大きい。これからまた、こういう機会をどんどん持っていきたいし、こういう仲間を少しでも増やしていけたらと思っています。

この座談会の記録をお読みいただいて興味を持った方にも、ぜひ仲間として加わっていただけるとありがたいと思っています。

それでは、これで本日の座談会を閉じさせていただければと思います。今日は本当に皆さん、お忙しいところ、どうもありがとうございました。これからも活動の推進に向けて、よろしく願いいたします。

全員 ありがとうございました。（了）

東京都社会福祉協議会 東京都高齢者福祉施設協議会
 令和4・5年度 地域包括ケア推進委員会
 つながれ ひろがれ ちいきの輪 in TOKYO ワーキングチーム 名簿

No.	選出区分	所属	氏名
1	チームリーダー/ 地域包括ケア推進委員会	あすなろみんなの家	今 裕司
2	委員	品川区立中延在宅介護支援センター・ 品川区中延在宅サービスセンター	小山 正子
3	委員	高田介護予防センター	相澤 和彦
4	委員	東大和市高齢者ほっと支援センターいもくぼ	長谷川 栄司
5	委員	東久留米市中部包括支援センター	津雪 聡子
6	委員	府中市地域包括支援センターあさひ苑	清野 哲男
7	委員	府中市立介護予防推進センター	沼尾 治巳
8	委員	とらいふ武蔵野	大脇 秀一
9	委員長推薦	東京都民生児童委員連合会	松井 理佳（4年度） 藤野 真琴（5年度）
10	委員長推薦	東京ボランティア・市民活動センター	榎本 朝美

（敬称略）

令和4年度 つながれ ひろがれ ちいきの輪 in TOKYO
 《東京の高齢者福祉施設による、地域によりそうキャンペーン》

コロナ禍における高齢者福祉施設・事業所の
 地域に向けた取り組みに関する調査報告書および事例集

2023年11月発行

編集・発行 社会福祉法人東京都社会福祉協議会 東京都高齢者福祉施設協議会
 （事務局：東京都社会福祉協議会 福祉部 高齢担当）

〒162-8953 東京都新宿区神楽河岸 1-1 TEL 03-3268-7172

<https://www.tcsww.tvac.or.jp/bukai/kourei/index.html>
